

早稻田學報

(行發日五回一月毎) 行發日五月五 號一十七百第 年二十四治明

本號目次

▲意見▼ 現代の三大病源……………早稻田大學 總長 伯爵 大隈 重信

▲報告▼ ●校報……………●基金部報告……………●諸分科講師囑託……………

科外講義……………●校醫囑託……………●春期職員慰勞會……………●留學生佐藤功一氏送別會……………

橫田講師送別會……………●有賀博士出張……………●圖書館報告……………●校友會報……………

●九州巡迴講話及び九州各地校友大會記事……………●札幌校友會……………●埼玉縣……………

加須町學術講演會……………●第四回天津校友會……………●久留米●信濃●臺北●鹿兒島●山梨……………

校友會記事……………校友動靜……………

▲面影▼ 講師橫山又次郎氏訪問記……………

▲研究▼……………●近けるスキンバーンと肉派の詩……………島村講師……………

……………●佛語冠詞に就いて……………安藤講師……………●英文に巧ならんと……………

欲せば……………宮井講師……………

▲講演▼……………早稻田大學豫科始業式に於ける高田學長の訓示……………

▲會告▼……………●早稻田哲學會及び印度會……………●讚岐●埼玉縣人會……………

……………●早稻田英語會演習會……………●專政四十年同期懇親會……………

●商科大會……………●文科大會……………●雄辯會公開演說會……………

第四十七回寄宿舍例會……………

▲運動▼……………第卅二回陸上大運動會……………●神戸對本校庭球試合……………●

東京俱樂部對本校野球試合……………●商工對本校庭球試合……………●本校庭球部大會……………

●本校遠的號射會……………●一高對本校野球試合……………

▲新刊批評▼……………

早稻田大學校友會

東京

込牛

意見

"Physician, heal

thyself." New Testament.

『醫師よ、汝自らを癒せ』

我早稲田大學雄辯會公開演說會に於ける總長大隈伯爵の演説は現代社會の弊源を道破せられたるものにして痛切を感ずること特に深きを覺ゆ今左に其梗概を掲ぐることをせり

現代の三大病源

私の演題は少し年寄に不似合な書生の演題にありさうな少し言葉が奇激なやうであるが事實存在して居る病氣、之を餘儀なく諸君に向つて有の儘に現在の有様を訴へるの己むを得ぬと云ふ不幸に出會つたのである、多分此多數の中には此病氣に罹つては居ないか知らぬが此病氣は傳染質を持つて居るから或は罹らんとしつゝある者がないとは言へぬ、殊に若い者に最も傳染が多い(笑聲起る)年寄も決して安全ではない(笑聲起る)此病源は是は病理學上から研究するも多分に歸するかも知れぬ、併し先づ三つに別ける、何であるかと云ふと一つは微毒、品の悪い言葉であるが事實存在するから餘儀なく有

の儘に微毒と云ふ(笑聲起る)それから今一つは結核、是はナカ／＼物騒なものである(笑聲起る)微毒と結核は矢張親類、身體が弱くなると結核が起る、矢張親類、而して第三に最も恐るべき大病、是は何であるかと云ふと國民の道德の缺乏(拍手起る)道德の痲醉、此病氣、此病氣が微毒結核と親類、縁の近いものである、物先づ腐り蟲之に生ず、腐るからして蟲が生じます、是が現在殆ど此傳染の毒を恐るべき速度を以て全國に段々非常な威力を以て吾々の仲間を攻撃しつゝあるのである、是は敵の攻撃より更に大なる攻撃である、之に對して國民は何と心得て居るか、斯の如き恐るべき敵が來つて居るのを無意義に經過して居ないかと云ふことを恐るゝのである、御覽なさい、此微毒は其人一人に止らぬのである、遺傳的に段々子孫に傳へる、而して激烈な傳染性を持つて居る、其次に結核、結核で段々人間の身體が弱くなる、微毒遺傳性の人はどうかと云ふと總ての病氣に抵抗する力を失つてしまふのである、抵抗力がなくなるから結核が来る、國際間も然り、何時でも抵抗力の弱い國が減びる、抵抗力の弱い國が何時でも虐められる、國家の膨脹も同じこと、抵抗力の弱い方に向つて膨脹する、恰も國家の膨脹は田鼠見たやうなもので

ある、露西亞などの膨脹力が東洋にやつて來て、殆ど何も抵抗力がない、中央亞細亞、蒙古、滿州、韓國、少しも抵抗力がないから盛んにやつて來たが、日本と云ふ石に出會つて、抵抗力に出會つて到頭侵略は止つてしまつたのである、其前は何所に向つたかと云ふと、露西亞の膨脹力は西の方に向つた、西に向つて膨脹したが日耳曼が強くなつた、日耳曼の力には田鼠も石に出會つて止つてしまつたのである、英國其他の力を以て「バルカン」に食止めた、モウそれから西には膨脹が出來ない、國家の膨脹も弱い所に向つて膨脹する、病氣も亦然り、人間の身體が弱ければ抵抗力がなくなるから病氣が傳染する、結核は實に恐るべき勢を以て傳染するものである、全體人類其者は有ゆる病氣に抵抗する力を持つて居るのである、國家亦然り、如何なる強大の國にも抵抗する力がある、是は自ら病氣に抵抗力を失ふから之に乗じて非常な微菌が侵入するのである曾て支那の所謂黃帝、大昔しの三皇五帝の黃帝と云ふ人が拵へたと云ふことであるが、又後世拵へたのであるか知らぬが、少くとも二千五百年前に出來た素問と云ふ本、此本に何と書いてある、精神内に守らば病何處より來らん、人間の精神が充ち満ちて居れば決して病が來らぬ、

斯う云ふことを言つた、是れは二千年前に眞理を道破したものである、人間其の者が十分精神が充ち満ちて健康であれば決して病は來らぬのである、若し來つても病に打勝つことが出来るのである、所が色々不道德な不行狀な微毒などに罹つて傳染質を持つた所の、其子供は悪くはないが、惡人ではないが、抵抗力がなくなると直ぐ結核になる、是に於て結核と微毒是が不道德と相俟つて次第に人間が墮落する、是が國家衰亡の本になると云ふ實に恐るべき今日の三大病が起つて居る、是は私は實に今日國家の爲めに此恐るべき傳染毒を一掃しなければ將來の國家、將來の吾々民族、殊に東洋に於ける日本民族は大なる使命を持つて居る、此大任を果すには健康なる身體にあらざれば果すことが出來ないのである、さうして正義とか自由の上に働く所の國民でなければ此大任を果すことが出來ないのである、最早今日東西文明の調和、調和をする時には必ず衝突が起るのである、此衝突に堪ゆることは出來ないと思ふのである、そこで此三大病源は病氣の根原がある、根原を研究すると云ふことは餘程必要である、根原を除くと云ふことは餘程必要である、此病源を除かなければ頭が痛いと言つて膏藥を貼るが腫物が出來たと云つて少しば

かり切解する位なことでは出来ない、病氣の根原がある、此病氣の根原は國民公德の缺乏、此公德を養ふと云ふことは餘程必要である、病氣の根原の先づ公德より治療すれば従つて微毒結核を減する事が出来るのである、斯う思ふのである、先づ時が許さぬから、是から、此三大病源を撲滅するに付ては國民の大運動を起して國民の全力を、恰も國難に舉國一致の力を以て奮闘する如き勇氣を振はなければ此敵のために國民は滅亡してしまうのである、國家は衰亡してしまうのである、此恐るべきことを諸君に警告するのは無用にあらずと信するのである(拍手喝采)

校 報

基金部報告

●清國大官の寄贈

一金貳千圓

清國東三省總督 郵傳部尚書 徐世昌

一銀壹千元

清國湖廣總督陳夔龍 前郵傳部尚書岑春煊

一金貳百圓

●基金募集報告(校友寄附)

一金壹千圓宛

東京 野城久吉●長崎 平田龜之助●福岡 松川駒次郎 熊本内田 金三

一金八百圓

金三

一金五百圓宛

●東京 村上松藏●同 細川享介●同 野本福太郎●山梨 大森慶次郎●熊本 野田義●熊本 濱田敬吾●福岡 大谷順作●福岡 中村道酒彌

一金參百圓宛

山梨 矢島榮助●長崎 谷口其三●熊本 林立夫●同 藤井克己●同 永民直喜●同 池田祇長●同 深水龍太郎●同 岡村龜太郎●同 藏原惟郭●山口 安井作三●山口 梶山正人

一金貳百五十圓宛

佐賀 武富禮太郎●熊本 入江清之●福岡 窪田操●同 前田雄之助

一金貳百圓宛

東京 西本其祐●清國 向後順一郎●長崎 田中直治●同 田代泰一●長崎 南彦朝●同 中尾三良●同 小川寅六●同 田中隆藏●東京 副島義一●佐賀 船津常吉●熊本 高本尚吉●同 中路新吾●福岡 笠原實太郎

一金壹百五十圓宛

福岡 牧野 富久

一金壹百圓宛

東京 三輪吉太郎●同 西川又次郎●同 小山省三●同 徳久武治●山梨 關善次●同 小宮山清三●同 秋山正一●同 加々美治兵衛●長崎 中津海知幾●佐賀 江口貞松●佐賀 黒田龍吉●同 矢次熊雄●同 中野子徳太郎●同 栗山資四郎●同 坂井孝太郎●熊本 堤政一●山口 富村順一●福岡 立山又四郎●福岡 小田榮次●同 森了一●同 相良隆治●山口 河原林樹一●同

一金六拾圓宛

長崎 深堀豐太郎●同 福岡後雄 同 今村朝信●同 小森安太郎●同 伊東榮根●同 岡部進●佐賀 島内良延●同 森卯一●同 板部武司

一金五拾圓宛

兵庫 菊地金次郎●山梨 土屋操●山梨 百瀬松太郎●同 淺川胡朗●同 雨宮敬作●東京 野尾正英●福岡 菱形重之●同 關半彌

一金參拾圓宛

長崎 原田豐一●福岡 中村堅太郎

●理科及商科講師賜託 四月新學期より左記の通講師を賜託せり

力學 工學博士 石橋 綱彦
微分方程式及變分法 工學士 一戸直次郎
英文文 工學士 鶴見 清宜
製圖 工學士 本橋 彌八

英語 パチエラリ シ、エツチ、マーシエ
英文文 オフ、アーツ

商業通論 早稲田大學商學士 宮島 綱男

●講師賜託 前記の外新たに左の二氏を講師に賜託せり

獨乙語 水野繁太郎

支那 文學士 橋本 増吉

●科外講義 四月十七日午後一時より大講堂に於て左の科外講義を開けり

一、濠州に於ける社會政治 堀越貿易商會主 堀越善重郎氏

●校醫賜託 今回牛込區東五軒町同仁病院醫長醫學士柴田長道氏を本大學校醫に賜託したり

●春期職員慰勞會 例年の通り春期職員慰勞會を四月十一日午後五時より牛込區看町吉熊棲に開催せり、出席者は高田學長を始め各部課職員百餘名の多きに達し、定刻に至るや實業の日本社

々員にして薩摩琵琶に堪能なる須田氏先づ餘興として「櫻狩」の一曲を彈せられそれより階上の宴席に移り、高田學長は、我早稲田大學が第二期發展の途に就くに當り諸般の機關擴大すると共に職員の数、年を逐て増加し、教務に従事する者を除くも斯く如く百數十名の多きに達するは誠に喜ばしきとなりとす今次の第二期計畫完成には吾々職員一同の奮勵一番を要するは言ふを俟ざる所なれば今後益一層協力一致して其職責を盡さんことを望むとて懇切なる挨拶あり、須田氏又「城山」の一曲を彈して興を添へられ、酒間紅裙の幹旋、雛妓の歌舞等ありて感興湧くが如く各自十二分の歡を盡して散會したるは九時半頃なりき

●留學生佐藤功一氏送別會 理工科建築科留學生として歐米へ渡航せらるゝ工學士佐藤功一氏の爲め四月十三日午後五時麹町區有樂町日本俱樂部に於て高田學長、阪田貞一、竹内明太郎、市島謙吉、大隈信常、田原榮、牧野啓吾、田中唯一郎、伊藤正、東儀季治の諸氏出席送別の小宴を催せり、因に佐藤氏は四月二十一日横濱出帆の宮崎丸にて渡航の途に就かれたり

●横田講師送別會 講師横田秀雄、谷田三郎の兩氏今回歐米司法制度視察の命を帯び四月十四日出發せらるゝに就

き四月九日上野精養軒に於て送別會を開けり來會者は左記二十名にして高田學長先づ起ちて送別の辭を述べられ次いで横田氏の謝辭あり主客十二分の歡を盡し同八時半頃散會せり因に當夜谷田氏は郷里に病人あり歸省中なりしより出席されざりしは遺憾なりき

前島 男爵 高田 早苗 坪内 雄藏
田原 榮 大隈 信常 藤山 治一
今井友次郎 柳川 勝二 小山 溫
阪本 三郎 池田 龍一 吉田 東伍
増田 義一 越澤 昌貞 鈴木秀次郎
伊藤 正 東條 季治 川口 潔

●有賀博士出張 四月十七日茨城縣筑波町小學校に於て開催せる同縣教育會大會に臨席し一場の講話を爲したり

●圖書館報告：其一：●閱覽人員
貸出圖書數及三月中閱覽統計左の如し

開館日數三十一日

種別 閱覽人員 貸出圖書數
普通貸出 八、八九八 二一、二四一
特別貸出 一九二 八二五
館外貸出 二二六 七六七
公衆貸出 三二二 一、一〇二
合計 九、六二八 二三、九三五
一日平均 三〇、五 七三、〇六
▲其二：●圖書新加月報 同月新加圖書は總計百五十七部三百九冊にして、内洋書九十九部百〇六冊和漢書五十八部二百三冊とす、之を細別すれば左の如し

部 之 書 洋										部 之 書 和									
歷史傳記	法學	政治學	經濟學	文藝學	地理學	教育學	理學	國文學	統計學	經濟學	政治學	法學	哲學	地理學	歷史傳記	國文學	統計學	經濟學	政治學
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	〇	二	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九	六	一	五	〇	二	一	五	六	九	四	一	四	二	三	一	一	一	一	一
九	六	一	五	一	二	一	五	五	八	九	四	一	四	二	三	一	一	一	一
九	六	一	五	〇	〇	二	一	五	五	六	九	四	一	四	二	三	一	一	一
一	六	一	一	五	二	一	二	一	五	八	九	四	一	四	二	三	一	一	一
一	六	一	一	五	二	一	二	一	五	八	九	四	一	四	二	三	一	一	一
一	六	一	一	五	二	一	二	一	五	八	九	四	一	四	二	三	一	一	一
一	六	一	一	五	二	一	二	一	五	八	九	四	一	四	二	三	一	一	一

●露文書籍の寄贈 海軍省にては今回の戰利品たる露文書八百餘冊を本館に寄贈されたり文學歷史の二種類大部分を占めつゝ何れも露國研究者には好資料たらざるはなし
其他圖書館への寄贈書目は誌末に在り

校友會報

九州巡回講話

去月六日天野博士浮田博士藤井文學士及び栗山主事は熊本に於て開かるべき九州校友大會出席を兼ねて基金募集の爲め同日午前八時新橋を發し途中神戸に一泊八日午後十二時三十分無事熊本に着せり各地の状況左の如し
●早稲田大學九州校友大會
早稲田大學九州校友大會は 本年四月八、九、十の三日間熊本縣熊本市に於て開會したり是より先き熊本市在住の校友諸氏は數次會合し本校との交渉其他の準備を專にし愈々當日となるや同地校友諸氏の一部は同會臨席の爲め本校より出張したる天野、浮田兩博士、藤井文學士、栗山主事の一行を同縣外大手田驛に出で迎へ同行して熊本驛に到着したるは八日十二時廿七分なりし

が同驛站には一般校友の出迎を受け一行十數名車を聯ねて同市京町一休に入り庵主石坂音彌太氏は豫ねて高田博士と親交あり特に一行の爲めに晝餐を用意し畫湖の鮮を膳上に供して饗應接待に力め之に對して一行深謝の意を表し夫より引き返して本妙寺に赴き廟所本堂に參詣し寶物館に入りて藤肥州の昔時を追懷し清正公三百年祭會より一行を同事務所中の奥書院に招待し伊喜見同祭理事接待の任に當り御酒、土器及び守札の配與を受け暫時休憩の上同所を出で熊本舊城の模型を觀覽したる後更に車を聯ねて加藤神社に參拜し同所に於ては同社三百年紀念祭會長男爵細川忠雄、同副會長村上一郎、同幹事長千田一十郎等の諸氏出で、一行を迎へ寶物館に案内して種々の説明を與へ且つ神酒の配酌あり熊本城内に入り車上藤肥州雄圖の跡を觀て再び市内に出で本校よりの出席者は研屋本店に投宿し校友一同は之に隨伴して旅館に入り一行の休憩を請ふて退散したり時正に薄暮の頃なりき
翌九日校友の一部は一行を旅館に訪問し來り相伴ふて午前九時頃市内藤公紀念共進會場に至れば他の校友は同所に待ち受け會場事務所の階上に案内を受け茶菓の接待あり一同は打ち連れて共進會場内を觀覽し終つて小憩の上市外

大江村縣立熊本中學校に赴き校長野田寛氏は接待に力め講堂に於て浮田博士、藤井文學士は校長の請に應じて適切な訓話を試み終つて一同は城東細川侯爵家の舊別業たる成趣園に到り園内を一巡して假山泉石を賞し豫め準備しありたる涼亭に入り晝餐を喫し同地名産鮎鰻の料理膳に上り閑談の裡に晝餐を終りて市内に歸り午後六時より一同本店の大會に赴きたり當日來會者は數百餘名に上り一同前庭假山の邊に於て紀念の撮影を行ひ次に同店階上廣間に於ける豫定の席に着し主催者側校友九州日々新聞記者高本尙古氏九州の校友一同に對し左の三案即ち

一、九州校友は一致團結し母校第二期擴張理工科大學の完成に盡力すること

一、夏期講習會を毎年九州各地に開催すること

一、九州校友大會を毎年一回適當の時期適當の地に於て開催すること

を提出して其賛否を問ひしに滿場拍手の裡に之を可決確定し次に同氏より特に熊本校友一同に對し左の一案即ち

一、早稻田大學校友會熊本支部を設置すること

右實行方法は熊本市在住校友に一任すること

を提案し其賛否を求めしに是れ亦異議なく滿場一致を以て可決確定し次に校友熊本辯護士會副會長林立夫氏起つて一場の挨拶を述べ浮田博士、藤井文學

士、天野博士は交々起つて一場の演説をなし。此時大隈總長、高田學長、校友島津男の祝電來着したれば直に之を披露し次に長崎縣校友辯護士小川寅六氏の挨拶藤原惟親氏の演説あり酒三行辛島熊本市長の發聲に依り早稻田大學の萬歳を三唱して乾盃し福岡縣校友の希望に依り來年は九州校友大會を福岡市に開會することに決定し談笑室に滿ち興趣加はるに從ひて一行に對し肥後一流の胴上をなし非常の盛況を極めて深夜撤宴したり

更に其翌十日は校友同伴にて博士一行は午後八時半研屋本店を出で濱々疊及び藤公三百年紀念教育品展覽會を參觀し夫より高等工業學校に赴き同校長中原博士の先導にて同校作業場を詳細に觀覽して其説明を聞き天野博士は同校の招請に依り講堂に於て一場の講話をなし經濟界の發展と實業教育の必要を述べて内外の事情を對照し専門の智徳を修さむる者も常識修食の要あるを説きて聽者一同の感動を惹き次に縣立熊本商業學校に赴き晝餐の饗應を受け藤井文學士は生徒一同に對し商業の目的社會を利するにある旨を述べ一方に於て天野博士は商業道德につき切實なる講話を試み同博士、栗山主事及び校友は市内二三の有志者を訪問し終つて午後一時より熊本市の中央大和

座に於て早稻田大學講演會を開會したるか定刻前より聽衆は續々接踵入場し來り開會の際には滿場殆んど立錫の地なく先づ校友内田益三氏挨拶を述べ次に同上林立夫氏は早稻田大學の過去、現在將來につき紹介し次に藤井文學士は新道徳につき浮田博士は東西文明の融合につき天野博士は財界の前途につき何れも思潮上の重要問題を捕らへて該博深遠なる講話を試み講話の終始には拍手室内を振撼せん許りなりしも講話中には滿場水を打ちたる如くに靜肅に聽講し何れも非常に感動し午後五時過ぎ講演を終り夫より熊本市内手取本町の精養軒に於て特別招待會を催ふし主として熊本縣校友有志者出席し長崎縣校友小川寅六氏亦之に参加し主賓併せて二十數名に及び林氏の挨拶あり高

本氏は校友の希望を代表して國武猪太郎氏校友に推選せんことに諮りしに直に講師一同の承諾を得夫れより水入らずの宴會に移り師弟の情を溫め歡談に時を移したり此間天野博士の謠曲校友の隱憂あるなど中々に盛況を極め各自奮つて第二期擴張の基金を寄附して退散したり

斯くて本校よりの出席者は十一日午前九時五十分熊本驛發の列車にて熊本市を出發し校友は之を同驛に送り一行の健康を祈り惜別の情を表し一部の校友

は之を途中迄見送り本校出席者は長崎に向ひたり由來熊本縣下よりは早稻田大學に出入せる者特に多數にして今や大學の聲譽は益々旺盛ならんとしつゝあるの際今回の大會及び講演會ありて一般に一層渴仰の念を増加したりと云ふ左に今回盡力されたる人々並に來會者の氏名を録して謝意を表すると云ふ有志者側よりは

九州日々新聞社長代議士山田珠一君、細川侯爵家々扶瀨戸競君、遠山喜三君、市立商業學校校長本八次郎君、中學校長野田寛君、林半次君、太田黑哲堂君、森田文也君、辯護士法學士古閑又五郎君、同井島義雄君、福田金壽君、山根康君、田中福平君、追源次郎君、市長幸島格君、九州實業新聞社主筆上田重舟君、藤公紀念三百年祭理事伊喜見文吾君、石坂源太君(次第不同)

校友側よりは

小原五五君、松尾謙德君、深川源作君、瀨瀨宇一郎君、黑澤昇次君、竹原正澄君、坂出三郎君、平岡則孝君、石橋純一君、川上正進君、松葉泰助君、大澤賢君、村上延太郎君、村上一摩君、内田益三君、深水龍太郎君、藤原惟親君、古田至陽君、入江清之君、井芹繼志君、野田義君、汲田祇長君、星子林君、松岡佛三君、藤井克己君、濱田敬吾君、林立夫君、水民直喜君、國武猪太郎君、高木尙古君、宮部峻峰君、池田貞記君、堤政一君、原田健吉君、二見昇君、楠田三郎君、高屋三郎君、中路新吾君、出田辰喜君、井上武七君、岡村龜太郎君、其他父兄及學校關係者數十名

●長崎校友會及講演

熊本校友大會に出席せし校友辯護士小川寅六君は東道的主人として同行十一

日午後六時一行は長崎驛着多數の校友に迎へられ上野屋旅館に投宿したり、同七時頃一行は直に趣訪富貴樓の校友有志の催にかゝる宴會に案内されたり一行は旅に疲れたれども母校を思ふ校友の誰彼の嬉しける面影と款待の誠意に接しては身の旅にあるさも忘すれと思はず談笑の裡に心身を融解せしむるを感じたり、校友も亦た母校を辭したる後の辛酸の跡を忘すれ、あらゆる人生の世路難の深き記憶をも此一夕の清宴にさらりと流して管て日夕師事したりし恩師先輩の溫容に接して何時となく母校在學中の頃の若々しき感情を復活せしめたるは其面容及び態度に明かに表象されたり。かくして閑談時の移るを覺へず各胸襟を開きて往を談じ來を語り一夕の清遊遠路の勞を忘れ和氣霽々の裡に宴を輟せしは午後十一時過ぎなりき、

十二日は早朝より市内の有志を歴訪し午後十二時半より市立商業學校の招請に依り學生に對し天野浮田兩博士藤井文學士の講話あり池田校長謝辭を陳ぶ浮田博士藤井文學士の兩氏は縣立中學校に赴き又一場の講話あり校友諸氏と共に出島上野寫眞店に於て紀念撮影を爲し午後六時精養軒に於ける有志者及び校友の招待會に臨席す開宴に先たち校友會を開き小川寅六君は先づ九州校

友會の模様及決議事項を報告し次に同地校友會幹事は是迄無任期の姿にて深堀、伊藤の兩氏の如きは拾七八年の間奮つて盡力せられしか今や校友の増加月に多く幹事の勞も察すべきに依り今回平田、谷口、小森外一名の四名となし長崎の名物たる無任期制を踏襲して幹事の勞を取られんとの發議あり滿場異議なく決定し四氏亦之を快諾せられたり、次に栗山主事を紹介して母校の近況第二期計畫の進行の程度基金募集の狀況を披露せしめ夫れより開宴平田新幹事は開會の挨拶をなし同地先輩の列席を謝し食後天野博士は一行を代表して謝辭を兼ね學校の近況第二期計畫の希圖を詳述され永見十八銀行頭取は立ちて早稻田大學萬歳を唱へ一行の健康を祝する爲め乾杯を爲し非常の盛會を以て宴を輟せしは十一時過頃なり

同日の出席者は左の諸氏にして學校關係者及校友は奮つて基金の申込を爲し又秀島氏は三菱造船案内の勞を取るべき事を申し出でたり

●第十八銀行頭取永見寛治君●控訴院判事池田正誠君●池田商業學務長●中學校長●商業會議所今西忠知君●港務部長錦織幹君●控訴院判事生律和太郎君●同富永貞平君●同富崎一君●辯護士小川寅六君●九州日の出社大車喜好君●平田龜之助君●深堀豐太郎君●伊東榮根君●小森安太郎君●田中隆藏君●松尾榮徳君●田中直治君●田代泰一君●松岡孝一君●谷口眞三君●朝永昌勝●原田豐一君●藤野若雄君●吉田弘文●

松平莊七郎君●山本靜也●中尾三郎君●中津海知義君●久原小太郎●福岡後雄君●今村朝信君●岡部進君●田中吉次郎君●入江裕●秀島英五郎君●石川勘太郎君其他(次第不同)

●佐賀校友會及講演會

十三日午後一時多數の校友諸氏に見送られ長崎を辭し同六時佐賀着、校友諸氏の出迎を受け一行の旅館たる唐人町向榮館に入る來訪者の應接に忙殺さる翌十四日は藩祖日朝社に參詣し市内有志を歴訪す、午後一時より白山町願正寺に於ける講演會に臨む會演場は定刻前より聽衆引も切らず入場し市内無二の大堂宇も之を容る能はず春雨霏々たる間に庭前猶人波を打つの盛況にしてやがて定刻に至るや白髮重顔の石丸市長は發起人總代として壯重なる開會の辭を述べられ深川忠吉氏の紹介に依り左の題下に

道徳の變遷

新教育

財界の現在及將來

佐賀の歴史

藤井文學士

浮田 博士

天野 博士

久米 邦武

各一時間餘の熱心なる講演あり薄暮に至りて漸く終りを告げしか終始謹聴し要點は手帖に止むる等聽講者の誠意と演者の熱心とは互に對照して莊嚴を極めたり偶々久米氏の歸省あり講演者の内に加はられたるは幸なりき

午後六時三十分より市の重なる學者政治家實業家の凡てより成れる招待會は

揚柳亭に開かれ石丸市長の開會の辭と各自の謝辭あり別席に於て天野博士栗山主事は校友諸氏と第二期計畫及び母校の現況を報告し校友諸氏は奮つて基金の申込をなし終つて宴會場に至り有志諸氏と談笑の間に時を移し主客非常の満足を以て會を辭せしは十一時過ぎなりき發起人は佐賀縣事務官國光五郎君、百六銀行頭取中野致明君●陸軍豫備少將長谷川真之君●代議士辯護士豐増龍次郎君●佐賀新聞社長辯護士江副靖臣●私立病院院長醫學博士池田陽一君●鎮家古賀製次郎君●市會議長福田慶四郎君●市長石丸勝一君●榮銀行頭取伊丹彌太郎君●大川運輸株式會社社長深川喜次郎君●代議士武間時敏君●佐賀銀行頭取古賀善兵衛君の十三氏にして出席の有志者は

百六銀行重役吉田久太郎君●同千住虎吉君●辯護士田中虎三郎君●廣瀨水電重役米穀取引所理事年田萬次郎君●鎮家下村詮之助君●佐賀病院院長白井鐵治君●製氷會社長峰梅三郎君●縣會議員下村平四郎君●商業會議所副會長野中萬太郎君●鎮家野依範治君●市會議員橋本安一君●谷口鐵工所々長谷口清八君●榮銀行重役伊丹誠一君●同伊丹彦次郎君●セメント會社重役田上源太郎君●地所會社重役深川米一郎君●眞崎鐵工所長眞崎照輝君●書肆舖河内莊助君●佐賀農工銀行頭取西英太郎君●佐賀病院々長上村春菴君●辯護士田崎慶一君●醫學士杉尾知明君●縣事務官大芝悠古君●佐賀郡長原田守造君●佐賀郵便局長長谷川五郎君●師範學校長川島庄一郎君●中學校長鈴木泰太郎君●高等女學校校長横尾義男君●龍谷中學校校長山田了然君●佐賀中學校教授相長益次郎君●實業家野口惠助君●同野中製炭一君●同森長次郎君●同川原辰太郎君、

●同高森金三郎君●同林貞九郎君
校友會側よりは

●西村縣知事●栗山資四郎君●中ノ千徳太郎君
●野口勘三郎君●内田清一君●深川忠吉君●田
口又次君●板部武司君●服部慶四郎君●森山熊
三郎君●小野專介君●今泉鹿一君●鷲崎熊雄君
●矢次熊雄君●船津常六君●原誠助君●島内良
延君●武富禮太郎君●黒田龍吉君●木山十影君
●田崎徹君●坂井幸太郎君●岸川清治君●深川
谷助君●森野一君●江口貞松君●廣瀬宇一郎君●
黒澤昇治君其他

十五日午前九時より有志者の希望に依
り各學校學生を佐賀中學に會し兩博士
及び藤井文學士は各々一場の講話あり
午後一時四十分發の流車にて門司に向
け出發す佐賀驛には武富代議士を始め
多數の有志家及び校友の見送あり

●門司校友會講演會

十五日午後六時門司着校友は小倉驛迄
出迎えられ一行は同地山田旅館に入り
直ちに萬松樓の關門及有志の招待會に
臨む、席定まるや別府敏治氏立ちて開
會の辭を述べ一行の勞を謝す、天野博
士は一行を代表して謝辭を陳べ手踊手
品等の餘興あり、會衆何れも打解け諧
謔百出、各々得意の隠し藝を出し或は
學窓時代の追懷談に腹を抱へ或は眞面
目に事業經營の手段方法を談じ意氣既
に滿韓を吞む青年實業家あれば教育事
業に獻身せんとする壯年あり、和氣霽
然滿堂の光景一家の如く端なく母校の

現狀を聞かんとの聲は一角に起れり栗
山主事は之れに應じ學校の現狀及び第
二期計畫の進行基金募集の成績等を報
告し校友は續々基金の申込を爲したり
斯くて全く宴を徹せしは午後十一時過
なりき其出席人名左の如し

●西田彦助君●西田幸太郎君●藤井高文君●村
井八百吉君●松川駒次郎君●森七郎君●小田榮
次君●中村堅太郎君●前田雄之助君●窪田操君
●牧野富久君●別府敏治君●關中源君●相良隆
治君●中村道瀧君●大槻音松君●大谷順作君
●丁吉次君●安井作三君●菱形重之君●立山又
四郎君●森一君●太神君●池本純吉君●永木石
藏君●池島誠三君●其他十數名の來會者ありし
も學報締切迄に報告到着せず芳名を落せしは遺
憾の極なり

十六日午前七時半より大谷順作君の案
内にて枝光製鐵所を參觀し丘上の一堂
に茶菓の饗を受け同所附屬のランチに
て若松港松川駒次郎氏の招請に依り中
餐の饗を受け一時同家を辭し又製鐵所
のランチにて若松築港の一斑を視察し
三時門司に上陸直ちに同市稻荷座に赴
く聽衆既に滿堂立錫の地なく貳千餘名
と號す演題左の如し

道德と經濟 藤井文學士
近世文明の傾向 浮田博士
財界の前途 天野博士

別府氏の開會の辭並に紹介に依り各自
の登壇得意の辭を振はれ午後六時閉會
す此日の聽衆は市内及び馬關の有力者

多數にして九州の地に於ける最後の講
演會として非常の盛況を來たせり

十七日は午前九時馬關發の列車にて歸
京の途に就くべかりしが下ノ關商業學
校長齋藤軍八郎氏の切なる望に依り之
を延べ門司校友の別に仕立たるランチ
に乗り更に日本本土の最西端の一角を

巡り更に瀨戸内海を巡航し十時より同校
に於て有志者及び生徒に向ひ一場の講
話を試み山陽ホテルに於て晝餐の饗を
受け午後一時四十分發の急行列車に投
じ兩博士及藤井文學士は歸京の途に上
られたり而して栗山主事は後事を整理
する爲め淹留し二十日午前九時三十分
發にて歸京せり

爰に此の記の筆を擱くに當り到處歡
待を受けたる有志諸君並に校友諸君に
深く謝意を表すと云ふ

●札幌校友會 法科科長小山溫氏(監
獄局長)公用を以て來札せられたるを
機とし同氏を招待し三月二十七日午
後七時より旗亭東亭に於て校友會を開
く、來會者左の諸氏なり

正賓 小山溫氏
●中里眞清●並木幾彌●稻川眞佐男●大瀧林之
助材行彦●伊藤眞次●小竹文次郎●原重文●長
谷川藤橘●大久保直一●加納鶴次郎●富宅益吉
●高橋與一●澤口齊三●今橋稔一●杉田虎獅振
●河原林桂一郎●上田森治

●埼玉縣加須町學術講演會 加須町及
づ其の附近の有志に依り成立せる早稻
田大學々術講演會は、去る三月二十八
日を以て其の第三回講演會を加須町尋
常小學校に於て開く講演は左の順序を
以て進む。

世界の現勢と日本の地位

本大學校友 梅澤 慎六

新日本國民の覺悟 本大學幹事 田中唯一郎

實業發展策 實業之日本社長 増田 義一

過去の日本と未來の日本

現社會と婦人 法學博士 中村 進午

講演は正午に始まり午後五時半に終る

聽衆約千二百名開會に先じて既に場に

溢るゝの盛況を呈し、實に未曾有の盛

會なりし、次に該會の幹事は柿崎六郎

網野豐次郎、梅澤慎六、大越柔郎、酒

卷景一の五氏にして本年秋季の第四回

を不動岡中學校に於て開催するの計畫

なりと云ふ。

●第四回天津校友會 當地校友會は昨

年二月第一回を開き昨年末青柳篤恒氏

來津の節第二回及び第三回を開きしが

今回第四回の會合を先月二十七日の夜

當地南市聚和成を呼ぶ南清式の支那料

理店に開けり

本校友會は邦人側と清國人側と交互に

主人となる事とし今回は清國人側の司

會にて今般小松林藏氏が東京建物會社

本店取締役として歸京する送別の意を

寓して開會せり集れる者左の十四名にして従前に比し清國校友の數増加せり

邦人側

小松 林藏

波邊 龍聖

中島 牛次郎

後藤 龍雄

中村 中

萬所 委一

清國人側

金邦 平

唐寶 鏐

李士 偉

盧 翔

陳紹 祖

汪 翔

紀文 瀚

馬 鑑 沅

始めに唐寶鏐氏司會者として開會の辭を述べ小松氏に對し惜別の意を表し東京に歸るゝの日天津校友の狀況を見らるゝ儘母校に報告ありたしと希望し之に對し小松氏は海外にありて兩國の校友が國境の隔を去り同一の學校に學びたる故を以て誼兄弟の如く相親しみ相扶け彼我兩國の爲めを計る純潔の會合に列するも今暫しと思へば心を傷ましむる極みなるも一旦結びし情誼は長へに淪らざるべしと述べ次ぎて當地法政專門學堂監督署理熊范興氏(准校友にして政治經濟科に二ヶ年在學したりし人)を推選校友と爲したき議出で一同之に賛成して當校友會幹事に宛て手續きすることを議決し歡談時を移して散會せり

●九州久留米早稻田校友會

早稻田大學卒業生、準校友、關係者等の催しに係る早稻田校友小集會は三月十六日篠山町川井正進方に會合(一)毎月一回會合の可否(二)筑後校友大會開催の可否等二案件に就き討議し何れも是を積極方面に賛成し其より四時美と漢詩美との優劣を論ずるあり早稻田に於ける廿餘年前の校風と現今の校風變化を論ずるなど思々に在校當時の喜劇悲劇を追想して感多時なるあり有興味にして近頃珍らしき會合なりき尙四月三日は筑後一圓校友大會を當市に於て開催すべしと云ふ當日の出席者は左の如し

田修 外數名

●信濃校友會 早稻田大學校友會四月四日南信支部發開式を松本市菊野亭に舉行し岡田庄四郎氏の開會の辭並に同會に對する希望を述べられ降旗元太郎氏現今政黨の狀態より説き起し將來政黨に關する意見に論及し自己今後政界に於ける態度氣饒萬丈當るべからざるものあり次に並木覺太郎氏の有益なる講話あり各十二分の快を盡して散會したるは同夜十二時なりき

●臺北早稻田校友會 早稻田に因む稻穂の帽章戸塚の花と謳はれし早稻田出身者を以て組織され目下全島を通じて會員三十餘名あり内臺北のみにて會員二十名を超ゆ幹事は渡邊判官片山辯護士の二名毎月一回會合の規約なり

●鹿兒島市校友送別會 田倉教諭送別會 早稻田大學鹿兒島校友は三月廿日午後六時より山下町鶴鳴館に於て今回大分縣へ轉任の田倉師範教諭送別會を兼ね日清生命保險會社の平田廣瀬兩氏歓迎會を催したるが一同着席するや島津久賢男開會の辭を述べ次に田倉平田兩氏の謝辭あり夫れより酒宴に移り主賓何れも十二分の清興を盡し午前九時頃散會を告げたり此の夜の出會者は田倉教諭、平田龜之助、廣瀬宇一郎、男爵島津久賢、日野辰二本田吉次、樋渡清廉、田代通輝、宇都宮虎二、免田幸藏、松下元吉、堀勇吉の十二氏なりき

●校友小會 豫て第二期基金募集に盡力されたる庄内の野尻義孝、笹原定次郎、齋藤眞三郎氏及び韓國京城の牧山耕藏氏等々々上京せられたるにより四月三日午後五時日本橋區龜島町借樂園に於て高田學長、有賀、浮田兩博士、大石熊吉、田中唯一郎伊東知也の諸氏出席し小宴を張れり

●山梨早稻田校友會 山梨縣に於ける早稻田大學校友は既に百余名に達し去る明治三十七年十月大隈伯を迎へて校友大會を開きたるが、今回も大隈伯高田學長三枝評議員田中幹事桑田豐藏氏等の來峽を機とし去る四月六日午後六時甲府望仙閣に歓迎會を催したり風間久高氏同地方の校友を代表して歡迎の辭を述べ高田博士は母校の近況殊に最近公表す可き第二期新學科設置計劃に關し詳細なる報告を爲し夫れより食堂

を開きて鄭重なる響應あり宴半にして大隈伯は五年前來府せる當時と現在との感興を語り、近時早稻田大學が清國學生に對しての新設備と同國の憲政施行等に關して趣味ある講演あり一同歡を盡くして散會せり當日來會したる校友の重なる人々左の如し

加々美治兵衛●三科重内●辻乙三郎●三木敬次郎●安田武一●三澤豐●内田順太郎●小林政則●雨宮敬作●雨宮景治●青柳徳太郎●風間久高●雨宮治郎●寺島三之助●廣瀬廣一●高木八太郎●長田瑛●新津隆一●小宮山清三●中村長榮●小尾勘一●淺川滿壽雄●大森國平●關善次●根津嘉一郎●乙黒直方●岩下貞寛●小林彦太郎●河野豊太郎●乙點武十郎●網藏平輔●市川文藏●土屋操●菊池金次郎●天野重平

●校友動靜 其後に於ける校友諸氏の動靜は左の如し

●大山 岩雄(三九大文)佐賀市成美高等女學校教諭

●掛斐 四郎(三九國)山梨日報記者となる

●木田 孫一(三九大政)一年志願兵隊後日本橋區兜町井野株式仲買店に入る

●副島眞喜雄(四一大文)佐賀縣立唐津中學に轉任

●松山 秀美(三九國)從來岡山縣津山中學校教諭たりしが今回轉じて岡山市廣瀬町岡谷機關山分靈に委任

●角田 柳作(二九文)仙臺中學を辭し布味に中學校經營の爲出發

●安藏 鐵七(三九國)株式光明洋行に入る

●宮崎奈良治(三九國)熊本縣立中學濟々覺赴任

●久保 熊治(三九國)仙臺市東北學院に教職を採

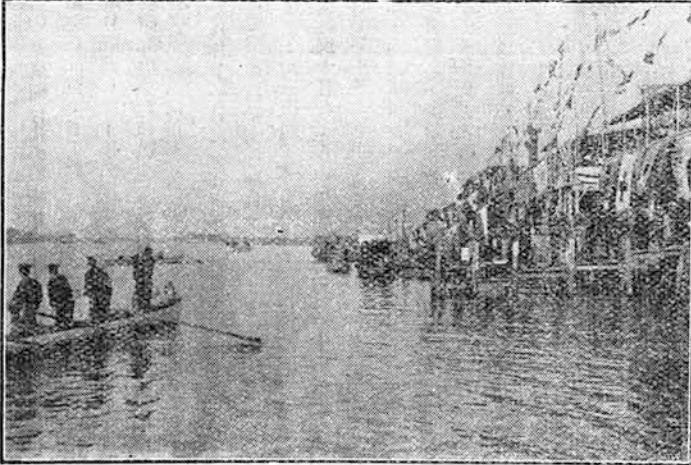
- 山中 慶吉(三九英)岐阜縣立斐太中學に赴任
- 久保田 清(四一商)大阪北區中之島三丁目大阪瓦斯株式會社へ入社
- 江部 香圓(四一大文)今同帝國通信社に入社し日本橋區博勞町一八へ轉居
- 尾崎林之助(四一商)日本醬油釀造株式會社へ入り尼崎第二工場勤務と爲る
- 池田 貞記(三四行)熊本市九州實業新聞記者となる
- 新田文太郎(大文)北海道廳立札幌中學校教諭に就任
- 角田 健吉(四一英)兵庫縣立豐岡中學校に赴任
- 小田野義壽(四一國漢)いはらき新聞記者となる
- 遠藤 作太(四一商)神戸市明石町三十九番館ニロープ商會に入る
- 寺田 英三(四一商)大阪日本紡績會社より清國地方に出張
- 松井 清作(四一大文)今國病氣保養の爲め山口縣與風中學校退任仙臺市元寺小路七六へ住居
- 井川 爲助(四一師英)兵庫縣立工業學校教諭に就任
- 川崎 壽男(四一英語)熊本市外大江村鎮西學院講師となる
- 久繼 敬作(四一國)埼玉縣熊谷中學校教諭に就任
- 本田芳三郎(四一商)大阪商船株式會社汽船部南丸事務長となる
- 小堀 卓郎(三八英地歴)德島縣立富岡中學校へ轉任
- 岸田 永英(三九英)茨城縣龍ヶ崎中學校より神奈川縣立第二中學校轉任
- 伊藤 儀作(三六史)千葉縣立銚子町商業學校教頭となる

●國分 正憲(四一大文)秋田縣立大館中學校教諭に就任

●宇津木稻太郎(二七文)岐阜縣農林學校より轉じて岐阜縣岐阜中學校に赴任

●越石 英一(四一國地歴)山梨縣立甲府中學校教諭となる

●高橋 源藏(四一大文)和歌山縣田邊中學校より靜岡縣掛川中學校へ轉任



●松谷安太郎(三四英政)古河鐵業會社東京本社を辭し横濱市裏高島町貳丁目四番地横濱電線株式會社に入る

●齋藤 保治(三九歷地)千葉縣立佐原中學より東京府立第四中學へ轉任

●大藤 六郎(四一商)茨城縣眞壁郡眞壁町山尾大和製絲所主となり専ら實業に従事

- 劉 同彬(四一清歷)清國北洋法政學堂歷史地理教習に赴任
- 埴原 正直(三〇英政)米國大使館一等書記官に昇任
- 又校友にして轉居の報ある諸氏は左の如し
- 廣田 七郎(三三行政)牛込區馬場下町四十二番地へ轉居
- 午來 大助(三八政)赤坂區青山原宿二百十八番地へ
- 岡部 甚一(三八法)早稻田鶴卷町一〇六山陽館へ
- 石川 賢參(四一政)牛込區北町四十一番地三浦館へ
- 伊藤重治郎(三六英政)北豐鳴郡高田村字維司ヶ谷二十一番地へ
- 小菅寅之輔(三八法)高崎市山田町七番地へ
- 川本九右衛門(三一政)本郷區弓町一丁目十番地へ電話下谷一四一二番
- 丸山 靜(四一商)麻布區霞町六番地へ
- 小野 俊三(四一大文)芝區伊豆子町三井家内
- 朝岡 鑑(三九政)靜岡縣富士郡今泉村今泉五十六へ
- 細川 濟(二六法)芝區田町九丁目十四番地へ
- 中島 駒吉(三九政)四谷區愛住町七十九番地へ
- 鈴木 壽(四一大文)赤坂區藤町四十一へ
- 日種 祐邦(三九大文)相模鐵道倉建長寺龍峯院へ
- 大沼十太郎(三三政)豐多摩郡千駄ヶ谷町五百八十一へ
- 加藤 鐵三(四一法)北海道根室本町柳田根室本店内へ
- 鈴木 茂(三四文)香川縣仲多度郡龍川村大字金藏寺より京都市外朱雀野村聚樂廻り字豐樂西町百二十五番地へ轉籍され白雲と改名さる

- 井上 保治(三八大法)四谷區百十番地へ
- 勝田 忠平(四〇政)京都市岡崎町大極殿北裏勝田別邸内へ
- 相耳 長雄(三七哲英)豐多摩郡西大久保村西大久保二〇三へ
- 佐藤德一郎(四一法)京橋區日吉町二〇原嘉道法事務所へ
- 大屋善次郎(三四法)三重縣松阪警察署の裏通りへ
- 江戸千太郎(四一國地歴)郷里福井縣三方郡十村へ
- 竹内 行一(四一大法)大阪市北區上福島北二丁目百十三番地福島館へ
- 西本 正美(四一大文)小石川區音羽町四丁目十二番地へ
- 佐保宗三郎(四一大法)郷里群馬縣北甘樂郡一宮町大字神農原へ
- 關口 泰輔(三六英政)北豐島郡高田村大字高田一四四三へ
- 石井 禎司(三八政)牛込區山吹町二九八へ
- 大磯 豐次(三九法)下谷區西町三二二〇號工肥方へ
- 池島 誠三(三七政)門司市畑田日本銀行社宅へ
- 藤田 未茂(四一商)東京市芝區高輪南町三十三森村市左衛門氏方へ
- 安齋 長三(四〇大政)本所區向島須崎町七十五番地へ
- 井汲 倉藏(二七英政)東京市芝區南佐久間町一丁目三番地へ
- 今泉 丈吉(四一大法)牛込區喜久井町三六吉村方へ
- 官島 剛男(四一商)牛込區原町三ノ五二へ
- 小澤長之助(三〇行)芝區白金志田町三〇へ
- 生方 敏郎(三九大文)小石川區原町廿七星野半二郎氏方へ
- 又校友にして結婚の報ある諸氏は左の如し

●前田

晃(廿八大文)博文館文章世界記者たる
同氏は電報通信社長光永星郎氏の媒
介にて工學士長田馨氏の女久野子と
結婚せり

●藤間

博(四一大文)富山縣代議士藤間民夫氏
の息なる岡氏は尾崎行雄氏夫妻の媒
介にて松島剛三氏三女直子と結婚せ
り

又死去の報ありしは

●引頭 百太(二四政)四月十三日長逝

面影

講師 横山又次郎氏



スウィッツル のセ
ネバニ開かれたる萬國
地理學會へ出席された
横山又次郎氏は此度歸
朝されたので記者は氏
の滞歐中の所感を聞き
取る爲めに二三回訪問

したが繁忙中の事として不幸にして面會の榮を得な
かつた。四月廿日授業の暇に數十分間の談話を記
者の爲めになされたのは記者の深く感謝する所で
ある此筆記も其の折の談話の大略に過ぎない。
氏は例の細面に粉粧の口鬚を生やした温厚の
君子である。記者の質問に對して氏は靜かに物語
られた。

實は諸方から談話を頼まれて居ますが大抵御斷
りして居るやうな譯けです、それで日記も其儘に
して手を付けなくて居るといふ具合なのです、
然し何れは發表しなければならぬし私も亦た
少し落ち付いてから公表しやうと考て居ます。
私の此度の洋行は萬國地理學會に出席するやう
に帝國大學から出張を命ぜられたのです。アメリ

カには五月二十七日に出發しました上陸後三週間
ニュヨーク、ボストン、ウアシントン、ルイウイ
ビツチバツク、オルバニー、ニューヘン等の諸都市
を過りました。此頃は學者達は大抵夏季休暇の旅
行中であつたので面會する事は得なかつたけれど
博物館等は大抵鑑覽する事が出来ました。七月
の二日ニュヨークを出發九日にフランスに著き其
れから直ぐセネバに達着しました。七月の二十日
頃から萬國會議の學術旅行をしてスウィツルの
諸方を漫遊しました。セネバに於ける會議は十日
計り繼續し終了後二度學術旅行をした。此旅行は
其研究の方面に従つて幾組にも分れてするのであ
る。

八日十一日にセネバに出發直ちにベルリンに着
いて、其れから一同はデンマークの都コッペンハ
ーゲンから汽船でアイスランドに渡つた。此航海
は通例十日かゝるのを嵐の爲めに十六日かゝつ
た。アイスランドではライキアベツクに宿泊し、間
もなく再びコッペンハーゲンに歸り、ノルウエー
の首府ストックホルムに一週間計り滞在、其れか
らフィンランドの都ヘルシンキフースに行つた、
此所は露西亞の壓迫を受けて居る所だけに大變に
親接に待遇された。ヒタスボークでは學士會員
のシミツド氏と逢ひました。此人は彼方でも余程
有名な人でカラフトへも二度計り來た人でカラフ
トの話をされて居た。其れから氏の關係されて居
る博物館を覽せてもらつた。其れからボーランド
を過りブタペストへ行き、其處からイタリヤに向
つて出發しビスビナス、ローマ、ネーブルスの諸都
市を訪うた。ビスビナス山に登つて見た。其れ
からローマに引返へしセネバに着いたのは十月三
十一日であつた。

其れから巴里、ロンドン、ブラスセル、アムス
テルダム、ボン、フランク、フオード、ミュニツクを
經てベルリンに着いた。ベルリンからモスカウを

經てスベリヤ鐵道に乗り込んで浦塩に着、其處か
ら汽船で敦賀へ達したのは三日未であつた。

記者は更らに萬國會議の模様を尋ねると氏は萬
國會議と言つても各研究の方面に依て皆な分れて
發表するので一班に就いて言ふ事は困難である
し、何れ發表されてから見やうと思ふから一々傍
聴する人は少い。例へば地理の方面では北極探險
の探險隊を各國の補助でやるといふ事とか、地圖の
縮尺や記號の一定とか一般社會には余り趣味のな
いものですと答へられた。

又氏はセネバ地方の風光を嘆賞されて湖水の遊
覽船の話、山に登るにツァン、ラード、パンとい
ふ車を用ひて婦女子も容易に登山して此美しい樂
園を見下される事、遠くモンブランの山々が如何
に美しく眺められるかといふ事を輕いエモーション
を持つて記者に語られた。

研究

●逝けるスキンバーンと肉

派の詩

(英文三年英文學史講義の參考)

島村 講師

スキンバーン Algeorn Charles Swinburne (1837
-1909) の詩を講讀した際に機會があつたら彼れ
の壯年の狂熱的、絶望的、肉欲、快樂的な特色を
最も發揮した作例を示さうと約して置いたか
ら、下に其の一二例を掲げる。彼れの後年の作は
餘程調子が靜まつて來たと謂はれるが、それでも
尙全體に熱騰の調を藏してゐることは争はれぬ。
其れが初期の作になると、夫のロセチ等と同じく、
濃厚な情熱に煽られて、動亂不安の音に充ち
てゐる。他のテニズン、ブラウニング等に見え

英詩人の特色ともいふべき tranquility の一味が
破れてゐる。是れがやがてスキンバーンの詩の根
本の特徴である。此の意味に於いて彼れの詩はむ
しろ世紀末的である。けれ共彼れの英詩壇に於け
る立場は言ふまでもなくテニズン、ブラウニング
の後を受け十九世紀の末二三十年を支配した最大
詩人であつて、去る四月十日に歿した爲、始めて
眞に英國の十九世紀詩壇は其の最後の幕を引いた
と言つてよい。

彼れの豐麗無類な詩調に就ては既に講じて置いた
通りであるが、内容の上で肉派と呼ばれる事に關
し一言すると此の文藝上の肉派 Fleshy school と
いふ名稱はビュカナン Robert Williams Buchanan
(1811-1891) が當時ロセチやスキンバーン等が現
はしてゐた詩壇の新傾向を攻撃して、就中ロセチ
を嘲ける爲變名で "The Fleshy School of Poet
ry" と題する一文を千八百七十一年十月の雜誌
"Contemporary Review" に出したのを初とする。
而して後夫の喜劇オペラの作者ギルバート Willia
m Souwenck Gilbert (1836-) が千八百八十一年
に "Patience" といふオペラでオスカイワイルド
やスキンバーンをモデルにした諷刺的のものを書
き、其の中の肉欲的詩人 Fleshy Poet といふのを
暗にスキンバーンに當てた。其の他最近ではイ
リスの小説壇に肉欲の方面を書くものが多といふ
ので、去年の秋頃の雜誌 "Bookman" が之れを
"The Fleshy school of Novel" と名づけて之
れに關する諸家の意見を徴した。

スキンバーンの詩が熱烈な戀愛を歌ひ、快樂を歌
ひ、終に其の極の苦痛を歌ひ、死を歌つた爲、其の
最好代表たる "Poems and Ballads" の第一集が出
た時、反對側からの批難が頂上に達し、彼れをし
て答辯文を書くの已むを得ざるに至らしめたこと
は人の知る所であるが、其の作例として良いもの
には "Ianus Venetis" "Dolores" "The Triumph

of Time" などがある。併し茲には紙幅の都合で全文を擧げる譯に行かぬ。要所のみを抜抄する。講讀の際に用ひた書中のもの例へば長らく劇詩では "Aalanta in Calydon" と短詩の "Iryhas" などは、勿論代表的作物ではあるが、譯る前に言つたとは違つた方面のメンキーンを代表するものと見られる。やつ短詩は "Before Dawn" の始めの譯

Sweet life, if life were stronger,
Earth clear of years that wrong her,
Then two things might live longer,
Two sweeter things than they;
Delight, the rootless flower,
And love, the bloomless bower;
Delight that lives an hour,
And love that lives a day.

From evensong to daytime,
When April melts in Maytime,
Love lengthens out his playtime,
Love lessens breath by breath,
And kiss by kiss grows older
On listless throat or shoulder
Turned sideways now, turned older
Than life that dreams of death.

This one thing once worth giving
Life gave, and seemed worth living;
Sin sweet beyond forgiving
And brief beyond regret:

To laugh and love together
And weave with foam and feather
And wind and words the leather
Our memories play with yet.

Ah one thing worth beginning,
One thread in life worth spinning,

Ah sweet, one sin worth sinning
With all the whole soul's will;

To hush you till one stilled you,
To kiss you till one killed you,
To feed you till one filled you,
Sweet lips, if love could fill;

To hunt sweet Love and lose him
Between white arms and bosom,
Between the bud and blossom,
Between your throat and chin;

To say of shame—what is it?
Of virtue—we can miss it,
Of sin we can but kiss it,
And it's no longer sin:

此の時短詩といふに、短詩といふのは、殊に始の方でメンキーンの此方面の思想が最もに現はれる。以上に引いたのが全篇の半分許りである。其の他前に書いた "Dolores" は、これは疑なく傑作の一である。其冒頭第一二

Cold eyelids that hide like a jewel
Hard eyes that grow soft for an hour;

The heavy white limbs, and the cruel
Red mouth like a venomous flower;

When these are gone by with their glories,
What shall rest of thee then, what remain,
O mystic and sombre Dolores,
Our Lady of Pain?

と歌ふ

O lips full of lust and of laughter,
Curled snakes that are fed from my breast,

Bite hard, lest remembrance come after
And press with new lips where you pressed.
For my heart too springs up at the pressure,
Mine eyelids too moisten and burn;

Ah feed me and fill me with pleasure,
Ere pain come in turn.

All thine the new wine of desire,
The fruit of four lips as they clung
Till the hair and the eyelids took fire,
The foam of a serpentine tongue,

The froth of the serpents of pleasure,
More salt than the foam of the sea,
Now felt as a flame, now at leisure
As wine shed for me.

Yes, she laid hold upon me, and her mouth
Clove unto mine as soul to body doth,
And, laughing, made her lips luxurious;

Her hair had smells of all the sunburnt south,
など歌つてゐるのを見て、其の詩調の一斑は推せられる。斯ういふ調子である。當時一部の文人から批評され、メンキーンの批評は即ち其の代表と見られたのである。今日では無論メンキーンの嘲罵文は、won an unhappy notoriety と冷に評し去られるに過ぎない。尚終りに是れもメンキーンの仕業と稱せられて千八百六十六年九月の雑誌 "Spectator" に詩人會議 "The Session of The Poets" と題する嘲罵詩が、變名で出た。其のメンキーンに關する節を抜抄して置く。要は、ロンドで詩人會議が開かれて、メンキーン、ブラザニン、フーノルド等の面々が集つて盛に談論して居る。席末の方で

Up jumped, with his neck stretching out like
a gander,

Master Swinburne, and squeal'd, glaring out
through his hair,

'All Virtue is bosh! Hallelujah for handor!
I disbelieve wholly in everything!—there!'

With language so awful he dared then to
treatem,—

Miss Ingelow fainted in Tennyson's arms,
Poor Arnold rush'd out, crying 'Soc!' in-
fectum!'

And great bards and small bards were full
of alarm;
Till Tennyson, flaming and red as a gipsy,
Struck his fist on the table and uttered a
shout:

'To the door with the boy! Call a cab! He
is tipsy!'
And they carried the naughty young gentle-
man out.

佛語冠詞に就いて

安藤 講師

第八 ni(の) soit(と)なる接續詞を重用する場
合には其後に來る名詞には冠詞を附せず
Ni officiers ni soldats ne reculent devant
l'ennemi.

士官も兵卒も敵前を退却せず
Ni prières ni menaces ne peuvent le fléchir.
懇願にても威嚇にても彼を屈從せしむる能
はず

Soit maladresse, soit indifférence, il n'a pas
pu se mettre dans les bonnes grâces du ministre.
彼は不調法なる故に無頓着な故に大臣の恩寵
を被る能はざりし

第九 beaucoup de, un peu de, une quantité de,
une poignée de, etc. 等の語の後に來る名詞
には冠詞を附せず
Les Allemands boivent beaucoup de bière.
獨逸人は麥酒を多く飲用す

Donnez-lui un peu de bonbons—Non, je lui
ai déjà donné une quantité de gâteaux et de
fruits.

否私はも一彼に菓子と果實を澤山與へました
Une poignée de soldats ont défendu ce château
pendant un mois contre un grand nombre
d'ennemis.

僅少の兵が多數の敵に對し一ヶ月間此城を防禦
しました

第十 否定體(forme négative)の動詞の後に來る名
詞には冠詞を附せずして de なる前置詞を置
くものとす

L'égoïste n'a pas d'amis.

利己主義者は朋友を有せず

Cet arbre ne portera pas de fruit à moins
qu'on ne l'élague.

此樹は枝を切らざれば果實を結ばざるべし
Le bibliothécaire ne prête jamais de livre
sans qu'on lui en donne un regn.

圖書館員は必ず證書を出さざれば書物を
貸しません

Je ne vous ferai pas de reproches.

余は汝を非難せざるべし
但し否定體の動詞の後に來る名詞に彼の又は其等
の示定の意味ある時又は之に形容詞を後に附しあ
る時は冠詞を附す

Je n'ai pas le dictionnaire que vous venez
d'acheter tout récemment.

私は貴君が近頃御求になつた辭書は持ちま
すや

Il n'a pas encore vu la maison de M. votre
oncle.

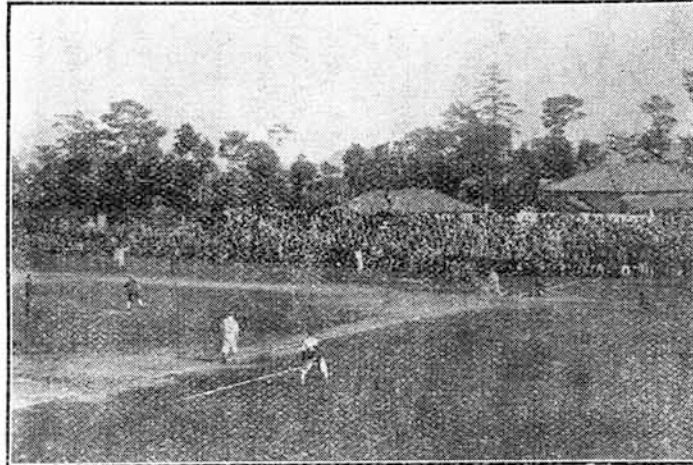
彼は貴君の叔父君の御家は未だ拜見致しま
すや

Cet homme n'a pas des sentiments si bas.
此人は左様に賤しき感想を有せず

英文に巧ならんと欲せば

宮井 講師

我邦今日の學生甲となく乙となく外國語を以て文
を屬ることの巧ならんことを願へども、其の進歩
の遅々として見るべきものなきは殆ど不可思議と
謂ふべき程なり、而して予は英文に關し其の原因



を探りて主として左の四點にあることを知れり、
一 學生の vocabulary 狭小なる事

學生各箇の使用し得る語數の少きは左記
の事實に見て知ることを得、彼等が否定
の意を表はすに大抵 no, not, never の
中の一を以てし、其他の語句を用ふるこ
とを知らず、然れども「然るに」の義に
は but を用ひ、「注意す」といふべき

所には一律に to care, careful といふ語
を下して、絶えて他語に思及はず、此く
の如き狭小の vocabulary を以て文を屬
らんとするは一本の小刀を以て家を築
んとするに異ならず

名家の文若くは新聞雜誌を讀むに當り其
の大意に通ずるを以て足れりとなし、絶
えて思を文の構造、語句の文法的修辭的
及論理的排置、及び各語各句の真義、他
の語句との意義用法の異同等に致さざる
を以て、彼等の讀書は全然作文と没交渉
となり、彼によりて此を利する所す毫も
あるなし、

文法のみに據りて文を屬らんとするは幼
學便覽一卷によりて詩を作るよりも難
るべしと雖も、中學時代に於て通じ居る
べき答の法則を忘却して大學の三學年を
卒り the greedy Kurobei の like とは
不審し給ふ學士殿も厄介ならずや、殊に
文の頭にあるべき疑問語を動詞の下に置
き、直接引用と間接引用に於て悉く代名
詞を混同し、甚だしきに至りては主辭或
は動詞なき「クローズ」を並ぶなど言語
に絶したる無法者あり、文法萬能主義の
反動も可なれども是に至りては文事の
「ニヒリズム」とや謂はん、

多作は能文の最大要件の一なり、斯道に
才なき人は特に作ること多きを利とす、
學校の課業の外には一字一句を筆にする
ことなき今の學生の作文の見るに足るも
の少きこと怪むに足らず

今の學生如上の四原因を除去すること蓋し英文を

能くする唯一の秘訣なるべし

講演

高田學長は先づ始業式に於て例年の如
く新入學生に對する懇切なる注意を與
へらる、中學卒業者の無試験入學とい
ふことに關する説明、又理工科に就て
は入學試験を行ふも其試験を施す意味
が他の官立學校に於て行ふ所と異なる
ことの説明を下し、無試験入學は下級
學校卒業者が上級學校に入る當然の權
利なることを説明せられた即ち

大體無試験と云ふことが、此學校の主義になつ
て居る、何故無試験で入れるか、是が當り前の
ことなんで、小學を卒業すれば小學を卒業した
權利に依つて中學に這入れなければならぬ、中
學を卒業すれば其中學を卒業した權利に依つて
高等學校に這入れなければならぬ、高等學校を
卒業すれば其偉大學に這入れなければならぬ、
それがなければ學問の系統がない、學校の系統
がない、尤も官立學校で試験を行つて居ると云
ふのは是は已むを得ずして行つて居るのであつ
て、其設備がない爲に行つて居るのであつて、
極めて變則なことである、此變則なものが行れる
爲に實は教育上の大弊害が、ここに胚胎して居る
譯なんで、折角中學を卒業して尙學問を繼續し
たいと云ふ、所が其繼續をしやうと云ふ爲に關
門がある、今迄自分の手掛けて居らぬ人の手に
依つて試験をされなければならぬ、其試験もど
う云う試験かと云ふと、入れる爲の試験でない、
拒絶する爲の試験であると云ふ、幾人其學校へ
入れると云ふことは極つて居つて、其以上は入
れられないから其の少數を入れて後を拒絶す

る、どう云ふ方法を講じたならば成るべく多數を拒絶して成るべく少數を入れることが出来るか、之を一生懸命考へて試験と云ふものが行れつゝある、おまけに其試験は數百の者を一時に集めて試験をする、中々三日や五日の試験で五百の千のと云ふものを一時に集めて其學生の眞の學力を本統に試験すると云ふとは鬼神ならばいざ知らず、人間業では出来ることでない、さう云ふ目に遭ふ、折角進まうと云ふ所をドンドン排斥され、一度ならず二度ならず排斥されると段々憂鬱になつて来る、それから色々弊害が起る、華嚴瀧邊りの繁昌したり淺間山邊に徘徊すると云ふ者があると云ふのも畢竟夫等が原因の一つで、元來餘程間違つたことが教育界に行れて居る、どうかして順序能く中學を卒業したならば其上の學科を其卒業した權利に依つて習つて往くことが出来るやうにしたい、どうせ學問と云ふものは坂を登つて往くと同じ譯なん、坂を登つて往くと同じ譯であるが其勾配を成るべく緩くしたい、殊更に険しい道でなく、成るべく緩やかな勾配で一年々々學業を進めて往くことをしたいと云ふのが一體東京專門學校を早稲田大學に改めた時の私共の考で、其主義に依つて無試験と云ふことをやつて居る、無試験入學と云ふことが學校の根本主義なので、人がまだ行はぬことを先んじて行つて見たいと云ふ所から之をやつた話なんで、所がそれを世間で、誤解する人もあれば、世間で誤解するのは宜しいが道入つて来るものが誤解して道入つて来るものがある、無試験で道入れるのだからと云ふ丈けのことを考へて、是はそれ丈けの學校の程度も低い、全體なら険しい坂を登りたいけれども登れないから成るべく樂の方に來やうと云ふ考で道入つて来るものがなきにしも非ず、諸君の中にはさう云ふ人はなからうけれども、

随分さう云ふのがある、半ば悔みつゝ斯う云ふ學校へ來ると云ふ人がある、險しい坂が登れない、自分の足の弱いことを悔みつゝ斯う云ふ所へ來る人がある、さう云ふ考で此處に來たならば、さう云ふ考の人が一人でも二人でも來たらば其人は直ちに考を改めなければならぬ、其考を改めず此學校に道入つて勉強して居る後に大なる後悔が起る、第一道入る時は樂だが道入つてから嚴しい、此豫科の三度の試験は三度一々及落は定めない、三度目に及落が定まる、三度目に及落が定まるのだから三度豫科で試験をするのも意味がある、成るべく手を引きたいと云ふ考で、成るべく世話を焼いて傷の付かぬやうに、一度二度試験をして諸君の成績が悪ければ警戒を與へる、警戒を與へる便宜を得る爲に途中で二度試験をする、三度目になつたら警戒を與へる場合でないから其時には良くない人は據らないから現役に留めると云ふことになり、現役に留める場合には少しも假借しない、道入る時は容易いが道入つてから一年半経つて本科へ往く時分には其試験は殊更に猛烈な試験は行はない、諸君を殊更に落第させる高等學校邊で行ふ試験はやらぬが、併ながら諸君が眞に本科に入る丈けの學力があるかないかと云ふことは遠慮なく試す、さうすると過去の経験に依ると始めて大學で學つた時などは一寸今日の如く道入つて來た、大勢成長つて來た人が一年半経つてどう云ふ結果が現れたかと云ふと、三分の一落第して仕舞つた、段々年々成績は良くなつて來た、今日は調べて來ないから最近のことは知らぬが、四分の一から五分の一、六分の一に落第者になつて居るだらうが、一年増しに人間が勉強して來ることになつたか、或は各中學の成績が宜しくなつて來たものであらうと思ふが、今日は甚しく怪我人を出さぬやうになつた、併し今でも一年半經過して本科へ往く時分

の阪は中々險しい、道普請をして見た所が由へ登るのだから少し位險しい阪のあるのは已むを得ぬ、其阪が先になつてあるから、今道入つた時が樂だから先も樂だらうと云ふので愚圖々々やつて居ると飛んでもない時分に諸君に迷惑の來るものがあつて、一年半は短くて宜いと思つた豫科を三年もやらなければならぬと云ふことが出来しないとも限らぬ、それだから道入る時分に容易かつたのは教育上行ふべき事を正當に行はんが爲に道入る時分に試験をしないので、諸君が長い間中學で勉強されたと云ふ諸君の權利を認めて之をやるのだから、一年半の高等豫科中々六ヶ敷い、殊に先豫科長の話のあつた通りに學校に依つて随分色々學力も違ふ、それが一時に集つて來るのだから中々容易なことでない、兎に角一年半豫科は六ヶ敷いから一生懸命勉強されて、本科へ道入る時分に満足に道入れるやう今から心に掛けて置いて貰ひたいと思ふ。

右の注意を與へたる後、此早稲田大學と云ふ所が教育上如何なる考を持つて居る學校であるかと云ふことに就いて專門教育を與へる一目的即ち模範國民たる修養をさせたいと云ふこと、即ち言葉を変つて言へば大學なるもの目的は二様なることを説明せられて一體大學と云へば皆さうでなければならぬ、諸君を人間にする、國民にする、一家の主人として押しも押されぬ人間にする、のみならず進んで一國の國民として國に對して義務の盡せる人間にする、音に普通の國民でない、他の國民を率いて立つ丈けの模範的國民高等國民に諸君を育て上げなければならぬ、是が專門教育よりより大切なことと考へて居る、專門教育一

の専門家になると云ふことも全く必要なことでありませうけれども、人間にならず専門家になつても仕方がない、國民にならず専門家になつて間になる、國民になり高等國民になつて而して尙其人が一の専門家であると云ふので其學術を研ぎ國に盡すと云ふことがありますから、斯う云ふ目的に依つて立つて居るので、即ち單に専門の學問を習ふ場所と云ふ許りでないと云ふことを能く諸君が考へて置いて貰はなければならぬ。

と陳べ、尙ほ曾て其の演説を纂めて出版せられてある教育時言を繙けば、此意味がその中に反覆詳説せられてありと説き、更に進みて早稲田大學の教育方針を説明して何處迄も此學校は早稲田大學と云ふものを立てた時から宣言して實際的の大學にしたい、實用的の大學にしたいと云ふことの根本趣旨に及び、尙ほ實用といふことの注意、學問を修める時間の節約より自然自修の必用に説及せられた即ち

……修めた學問を應用の出来るやうにして此學校を出したい、已は學者だから學理は知つて居るが實際のことに就いては少しも役に立たぬと云ふ人間を造りたくない、斯う云ふのが此學校の趣意で、所が實際と云ふことが間違ふと淺薄と云ふやうなことに聞へる、學理はどうでも宜い、實際の間に合ふ人間なら宜いと云ふことに解釋される恐れがある、それでは本統の實用でない、出来る丈け深く學問して學理を研究して、さうして學理の儘でなくどう應用するかと云ふことまで多少工風を積んで世の中に出る、斯う云ふ譯だから單に學問を習ふ學問

を修めると云ふことになつてはいかぬ、併し實用的大學だと云ふのは間に合せる人間を造る場所と思ふてはいかぬ、詰り世の中の大學教育が唯學理だけな研究して人間を出すのでは其天職を果して居らぬ、充して居らぬのであるから、出來得べくば學理のみならず尙學理の應用にまで進んで應用的頭にする人間を出したい、卒業生を出したいものだ、少なくともさう云ふことを主義として居る、方針として居る、それは悪いことでない、今日の如き時勢の學問の趨勢がそれだから、何處迄も大學と云ふものは實用的人物を造らなければならぬと云ふことになつて居る、是が世界中の滔々たる教育の大勢である、どうしても吾々もそこを飽迄も狙つて往かなければならぬ、所が狙ふ所はギョと上である、且高く深い所である、實際と云ふことは學問に何か加へたものと云ふ位のこと、而して修める年限はどれだけである、學問をする時間はどれだけであるかと云ふと高きから四年半しかない、他の帝國大學や何かは其下に高等學校と云ふものを控へて居つてどう少なく積つても六年、若くは學科に依つては七年以上のものもある所がある、此方は四年半しかない、どう考へても一年半だけは時間が儉約してある、習ふ時間は儉約してあつてさうして諸君に吾々が期待する所、諸君が力めなければならぬことは中々多大である、斯う云ふ譯である、どうしたらそれが出來やうか、是は一の工夫がある、出來ないことはない、どう云ふことが工夫であるかと云ふと、先刻も科長の話された所謂自主と云ふことで教師に依頼して勉強すると云ふのでなく自分が自分を主として勉強する覚悟が諸君にありさへすれば四年半で六年なり七年の仕事が出来る、人に講義を聞いて試験を受けると云ふ依頼主義であれば中々時間が掛る、時間を掛け

てやつてもさまで効果が現れない、所が自分で出来るだけ勉強して自から研究をする、其研究の指導者研究の案内者顧問と云ふものに教師をする、教師から世話を焼かれて勉強するのでなく、自分で勉強して分らぬことは教師に聞く、云ふ、自主的研究と云ふ態度を是から先き諸君が四年半取られさへすれば、そうすれば他の六年若くは八年に優るだけの効果があるので、斯う云ふ風に四年半やつたのは依頼して六年やつたより効果が多大だと云ふことは是は牡丹餅大の印を諸君が捺せと云へば捺して差支ない、此覺悟がなければ吾々が理想とする所に達せぬのみならず、諸君が折角此先き四年半勉強されても其結果はどうも餘り見るべきものはないから、何處迄も其點に考を與して貰ひたい、豫科の中に例へば英學なら英學はチャント自分で下讀をして教場へ出て出なくても宜いまでに研究して、分らぬ丈を教師に聞く、教師の講義を聞いてもさうで、詰り大体一人で讀めるが併し講義を聞くこと分らぬ所が分るやうになる、總し準備をする、教場に出る時に自分が欲を出して學問の欲を出す、學欲を盛にする、此四年半の時間を利用すると私の言ふやうに確に利益である。

と陳べられ、次に新たに設けられたる理工科に關する注意事項を説明し、豫科は去年から開始せられ、此秋に電氣、器械、此二科の本科の開けること、來年になると電氣、器械の外建築と鑛業と云ふもの、四科が開けること、段々其先に學科を殖して往く、所謂是が學校の第二期計畫の端緒であるので、又今日最も時勢の上に於て必要なこと、感じた爲に此計畫を爲した譯であること、來年の九月迄には總て器械的設備、建築的設備、人物的設備、皆整ふて堂々と門戸を張つて今年の九月には理工科を開くことが出来る譯であることを説明せられ、終りに臨んで官、公、私立といふことに就て茲に誤解のあるところを指摘せられ、私立學校を官立學校より低く見る所の通弊を戒めて

「一體私立學校と云ふものを官立學校より低く見ると云ふ惡習慣が世の中にある官尊民卑の弊害なんで、世の中にあるのはまだしもだが、事に依ると其學校に居る者か、さう云ふ考を持つて居ると云ふことが屢々見受られる、此早稲田の學園の空氣に半年一年觸れたものには一人もない、殆ど確にないことを保證するけれども随分都會の學校に往くといふと限らぬ、第一教師なども自分の所の學校の規則に並べると、自分の教師だと云ふことを吹聴するが爲に人の學校の教師だ帝國大學の教師だと云ふことを書いて満足する風がある、賤むべしきことである、早稲田大學は最高の學問の府で此上場所はない、現在はまだ種々不完全なこともありませうが、抱負としては官立、公立、私立、何れの學校より上に立つやうにならなければならぬといふ考でやつて居る場所である、又學校が官立である公立である公立であると云ふのは其學校を作る時の歴史である、私の人が作つたから私立といふ、官が作つたから官立と云ふ、公共團體が作つたから公立と云ふ、學校を作る時の手續の歴史に過ぎない、出來て見れば官公私立皆同じであつて、其中で教育上の効果の現れたもの、學問の程度の高いものは、是が即ち一番良い學校で私立であらうが、官立であらうが、公立であらうが、私人が金を投じて作つたから賤しく、官で金を投じて作つたから賤しくないと云ふ、そんなことはない、寧ろ私財を抛つて學校が出來れば其方を多としなければならぬ、出來た時の差別が歴史的の差別はあるが其善い悪いといふことは其學校が上つて教育上の効果に依つて始めて判斷の付く譯である、私立學校の學生たるものでも往來を歩くに官立學校の學生に七分道を譲つて肩をすばめて三分を通つて歩くこと云ふさしい最見は出して貰ひたくない、それと同時に他の學校の人と無暗に軋轢をしたり喧嘩をして貰ひたくないと思ふ、世の中は競争と云ふことが大切で競争心と云ふものは十分持たなければならぬ、一日競争の心がなければ忽ち人間は腐敗墮落して仕舞ふ、彼何人ぞや、我何人ぞや、帝國大學の學生でも高等商業學校の學生でも一も譲る必要がない、又譲るやうな量見では早稲田學園を辱める、一步も譲るに及ばぬ、競争心は十分持つが宜いが、軋轢をしてはならぬ、競争は君子のこと、軋轢は小人のこと、君子は和して同せず、小人は同じとせず、此他尚色々御話したいことがありますが、此學校に御出の中には屢々諸君に見へる機會がありますから其折節段々私の意見のある所を諸君に漏したいと思ふのであります。(拍手喝采)

と陳べ降壇せられた、實に學長のこの訓示は懇切周到を極めたものである。

會合

こゝには講師學生の諸種の會合を載録す

▲早稲田哲學會 三月二十六日金曜午後六時より、第十二回研究會を早稲田

大學圖書館上に開き、本會の事業に關する要件を議したる後、高橋正雄氏の「認識の妥當性に關するグリーン」の説に就きての講演あり、終つて懇談の後九時半退散す。當日の出席會員は左の十三名なりき。

石橋湛山。西本正美。大杉潤作。金子馬治。武田豐四郎。高橋正雄。紹慶密應。村岡典嗣。藤井健治郎。小出慈忠。白松孝次郎。平野履道。關與三郎。

▲早稻田哲學會公開講演 早稻田哲學會にては第一回公開講演會を四月二十四日(土)午後一時より早稻田大學第十四番教室に開催し左の講演ありたり。

一、開會の辭 藤井健治郎氏。
一、眞理の基礎(新興文藝の意義を論ず) 石橋湛山氏。

一、氣分本位の生活 白松孝次郎氏。
一、學者の權威 金子馬治氏。

當日は會員金子馬治、藤井健治郎、武田豐四郎、白松孝次郎、片上伸、平野履道、藤本慶祐、井上忻治、石橋湛山、高橋正雄、大杉潤作の諸氏を始めとし、來聽するもの二百名に垂んとするの盛況を呈し、好結果を收めて午後四時半散會せり。

▲早稻田印度學會 同會は四月十七日(土曜)午後一時より第四例會を本大學圖書館上の研究室に開く。本月及び來五月は今回わが大學を卒業すべき六名の會員が各自紀念講演をなすべき豫定

故、當日は其中左の三氏之に當れり。

一、古代印度の葬式、大智三年 福井四郎五郎氏。
一、余の吹拂多數觀、同 逸木盛照氏。
一、大小乘の關係に就て 同。

會長本大學講師武田豐四郎氏は、右の講演に就きて一々略評を試みられたり。四時講演終了の後武田會長の會況報告あり。夫より茶話會に移り、懇談の後五時散會す。當日は新入會員増加の爲め極めて盛會にして、武田講師の外左の二十三名列席せり。

●白石芳留●宇佐雄雄●傳泰親●馬田行啓●林隆興●逸木盛照●福井四郎五郎●伊藤尚●雲釜龍耳●木下永二●片鳴幸吉●山田俊海●口入田覺了●朱宗榮(清國留學生)●燕世奇(同上)●姚建猷(同上)●本澤一爾●濱田幾次郎●藤井新●古川準人●志手環●山名万次郎●比日重順。

▲早稻田大學讀玉藻會 四月四日在東京早稻田大學讀玉藻會第五回卒業豫錢會を麴町區九段坂上富士見軒に於て開催定刻午後五時に及ぶ會長松平伯爵を初め來賓、會員等總て來會先づ庭内にて一同紀念の撮影をなし各自着席の上晚餐會を開き同會幹事藤井政八君起つて簡單なる一場の挨拶をなし次で

會長松平伯爵の祝辭幹事佐佐木政治君祝辭朗讀演説及卒業生各自の答辭等ありて最後に來賓早稻田大學圖書館長市島謙吉氏起ちて左の意味の訓戒演説を爲せり

人は社會へ出る時には第一平凡でふ事を充分考察して見なければならん平凡と言ふ事は處生上の秘訣である英國の如きも世界に其勢力を擴げたのは全く該國民が平凡なる人間であるからである石川丈山は處生の秘訣に關して十ヶ條を書いた事がある「何々する勿れ」「何々する勿れ」と言ふ消極的方面の事ばかりに關しての訓戒である。併し丈山の消極的な訓戒よりは自分は古川市兵衛が言つた事に感心する、平凡なる事だ曰く「運」「根」「鈍」の三字であるが自分は之れに「感」の一字を供へて諸君に呈上する

次に早稻田大學講師法學士大隈信常氏は「諸君と自分とは二重三重の關係を有しとりわけ松平會長とは幼年時代よりの友人にしてお互に喧嘩などをやつた事がある」といふを初めに「學校内と社會との異點」に就て長間時の演説を爲し最後に早稻田大學幹事田中唯一郎氏起つて一場の演説あり又校友辨護士三木武吉氏は校友を代表して挨拶を述べ一同歡を盡して同午後九時散會したり、猶當日の出席の來賓、校友、卒業生出席會員等左の如し

●早稻田大學講師大隈信常氏●早稻田大學圖書館長市島謙吉氏●早稻田大學幹事田中唯一郎氏●會長松平伯爵●校友萬朝記者中村万吉君●東京毎日記者橋高廣君●辯護士三木武吉君●會社員

瀧清君●卒業生太田治補君●根津繁三郎君●橋本康己君●壺井忠雄君●會員石井宇次君其他

▲早稻田大學埼玉縣人會 埼玉縣人會は專門學校創立の當時に起り、最早今日は第四百四十六回を算するに至り縣人會中最も古き歴史を有するものゝ一なり。目下高田學長を名譽會長に推戴して毎月或は隔月集會を開き、本縣出身の校友學生一堂に相會し歡談高談湧くが如き中に早稻田學風の發揮と各人の切磋琢磨とを期す。去る三月四日田中幹事邸にて茶話會を催し鹽澤、巽諸講師も來會せられ演説あり余與あり田中先生得意の謠曲ありて甚だ盛會なりき。而して高田學長、田中幹事、種村、小久江、坂本諸校友が不斷本會に深き同情を垂れ其の指導に任せらるゝは本縣學生の等しく感謝に堪へざる所なり。又本年二月幹事の改選をなし柿沼昂、加藤虎雄、渡邊世仰の三氏幹事となり梅澤慎六氏之れか顧問たり

▲早稻田英語會溫習會 早稻田英語會は四月九日十日の二日間午後五時より本校大講堂に於いて其溫習會を開催した。開會前より智識と美を愛する此一團の會員達は如何にして今回の大會を價值あるものとせしむべきかに腐心して居る如くはや黄昏頃から此方彼方に頭を集めてひそ／＼と會話を始めて居る。或は夕闇にまぎれて總長銅像前に

立つて演説の稽古をして居るものもある。五時頃からは平生は男の靴にのみ踏まれて居る大講堂は美しい紫の羽織や美装した西洋婦人の一團の衣褶の音さへ聞くやうになつた。大隈會長の開會の辭に連れて温習會は開かれた。山田秋二郎君(高豫文)の暗踊に續いて滑稽劇『好運兒』では會員の非凡な技術の豫想を來會者に與へ、婦人選舉論及び討論『大學教育に於ける試験廢止の可否』を以て一部を無難に過した。

二部はテニスの『六百騎』(高豫商)に依つて初まり、モリエールの喜劇『魔法醫者』(大商、文一年)といふ大膽なる試みに依つて續かれた。衣装と化粧術に於いて粗雑の難こそあつたけれども土屋昌美君の樵夫グレゴリ及び妻のドルカス、井上昇君の村長其他諸君の努力のある點は充分に理解された。大柴龜太郎君(大商三年)の演説『實行家の本領』には語學の力以上のものが包含されて居た。最後に今回の呼び物とされて居る悲劇オセロの幕は靜かに上げられた。第一場に於ける池田常道君のイアゴ遊部松太郎君のオセロは先づ觀者を驚倒した。特に池田君の表情に富んだジスチュアと遊部君のムーアらしき扮装は人物の配合に於いて確かに成功したものであらう。第二場寢臺の間に於けるデスデモナ及び侍婢エミ

リアは確かに前二者を凌いで余りあるものと言いてよからう。唯何となく科白のしつとりと落ち付かなかつたのはレセテイションの乏しかつた事を思はせる。最後のデスデモナ壓殺後のオセロ、イアゴ、エミリア三役共に此温習會に對して喜しきキアタストロフエを與へたものと言つて好からうと思ふ。

(一記者)

▲專政四十年同期懇親會 四月十七日午後五時より牛込通寺町求友亭に於て開催せり會するもの在京者二拾餘名外に横濱より松尾保三郎氏大阪より植田市之助氏來會せり田中靜衛氏開會の辭を述べ次て本會を具體的のものに組織し將來時々會合して親交を温むる外各自意見を交換して相互に利益を收得したしとの動議あり即ち満場一致を以て左の諸件を議決したり

一、本會を丁未同盟會と稱する事

一、本會事務所を牛込區湯場町八番地田中靜衛氏方に置く事

一、專政四十年出身者は總て本會員たるを得る事

一、本會に常任委員三名を置き之れが任期を一年とし毎年一月改選當分在京者中より出す事

一、年四回例會を開く事其時期場所等は委員之れを決定する事

一、會員にして住所を移轉したる時は直ちに通知する事

而して本年度委員は久貝彌三郎(中橋

氏改姓)金子末利田中靜衛の三氏當選したり

午後七時より酒宴に移りイヅレモ學窓時代の昔を忍んで放談高論數名の紅裙此間幹旋して宴漸く酣に歌ふ者あり舞ふものあり大に觀を盡して散會せしは同十一時頃頗る盛會なりき。

▲商科大會 四月一日商科大會を大隈總長邸内に開催した。此日は朝から花曇りに少し曇つて、灰色の雲の間から時々鋭い太陽の光が射出して何となく苦悶と光明をシムボライズしたやうな日であつた。午前九時頃から早稲田商科生等は制服制帽の若々しい姿を學校前又は總長邸の外に出沒さして居たが、十時頃には一同に會場に集會して開會の時を待つて居た。やがて居城新三郎君(三年)の開會の辭があつて、續いて學生四五人の五分演説あり、其れから商科主任田中穗積氏が春の木芽が青くなる頃は學生の顔も青くなるとして有益な訓諭的演説を試みられ、次ぎに太田黒重五郎氏は日本銀行業者の不道德を慨し商業者と道德の關係を痛論されて壇を下りられると間もなく大隈總長登壇『今日は諸君に二つの議論する。初めは諸君を奨励し、其後で又戒める事にしよう』と言つて先づ前漢の文帝の時代、帝も國民も大平を謳歌して居る時賈誼は一人其否を叫

んで治安策を帝に奉つた。漢は今薪を積んで其上に寐て居るのだと嘆息したといふ古事を引照して『日本は今歴史あつて以來の隆盛の時であるが、我輩は賈誼の如く泣きもしない。然し我輩は大觀する。勇者は敵に望んだ時は弱兵の野に顯はれるのを見れば失望すると云ふが今日吾人の周圍に迫つて居るのは大敵である。吾輩は今や劍を提げて初陣に立たんとして居るのでないか』と學生の注意を煥起して

「現在の日本では第一に國民の氣力が足らぬ、次に經驗が足らぬ。又資本も足らぬ、更らに大なるは日本が今日債務國の位置にあると云ふ事だ」

と總長は我國は日清、日露兩戰役及び其他の公債を合して拾五億の外債を負ふて居る、これを一人前に平均して見れば三拾圓、又日本現在の戸數を一千錢として一戸百五拾圓の割合で外國に借金して居る。我々は如何にして此外債を支拂ふ積りかと憤慨され、更に一轉して經濟問題が如何に國方の發展と國際的競争の要因をなして居るかを細論され、國際競争の下に優等の位置を占むる爲めには富の程度を高めなければならぬ、富の程度を高むる爲めには國內の商業計りでは駄目であつて廣く國外に求めなければならぬ

「合衆國の生産は非常なる速力を以て進んで居

る、此上國民も莫大なる無形の生産力を費消する事が出来ぬので他方外國の市場を求めると至つた。合衆國が既にこれだ、日本の如きも必ず一方に市場を求めざる事になる」

と説いて、支那は世界で最も有望な市場である。世界の列強も既に其れを認めて此好市場を得やうとして居る。日本は此好市場に對して最も便利な地理的關係を持つて居る

「支那は如何云ふ地位にあるかと云ふに我等に最も近い……其上人種同文である故日本が支那の市場で競争するには非常の利益を得て居る」

と論結し更に一步を進めてパナマ開通の結果日本の商品は世界の需要となる。然も日本人は勞働に堪えて賃金が比較的安値で出来る。此點に於いても社會主義者の運動に依つて勞働時間の制限されて居る諸外國に對しての一大利益である、諸君は此幸福なる時代に生れて最も有望なる商業に従事されるのだと終りに臨んで總長は商業と道德との關係を論じ太田黒氏の演説に對して輕い批評を加へ

「昔の道德は全く空念佛で諸君が新しく道德を組立てるのである。其新道德を以て諸君は外に對つて大いに商業上の競争を試み金満家となつて學校の建築を盛んにせられるのを待つて居る」と拍手と哄笑の間に總長自身も微笑しながら降壇、續いて天野博士登壇商科には擬國會などを開いて政治家の模範もしい文藝協會といつて役者の真似

もしない、商科はやつぱり獨立した商科の特色があると會衆を笑はして置いて太田黒氏及び總長の演説に關聯し商業と道德の關係を論じ「正直は最上商略なり」といふ事を正直にすれば金を得られると解するのは非常な誤解で正直は其れ自身で正しい。經濟程此道德と密接な關係を有つて居るものはない經濟思想の根本はやはり道德であると論斷された。

此講演の終ると共に一同撮影會員の薩摩琵琶數曲、狂言伯母が酒、會員の演奏等ありて閉會を告げたのは午後五時過ぎであつた。

▲文科大會 本年度文科大會は例規により二年首唱に依つて卒業生豫餞會を兼ねて三月廿七日(土)大森八景園に於いて開催された。前日より雪は朝になつて不思議に止んで樹上を薄く包んだ白雪の上に春の美しい朝日がきらつくと照り輝いて居た。殆んど二百に近き文科生は豫定の如く各方面から品川停車場に集合し其れより講師校友の一團と混じて潮風を沈びながら大森八景園に着いた。其處から白帆の片々として見えける東京灣、特に歴史ある鈴が森の淋しい松井木は會員の視線を申し合はしたやうに捕へた。間もなく同園内の寮亭に入つて幹事の開會の辭卒業生總代の挨拶あつて其れより再び庭園

に出で海を望みながら午餐を喫した。

午後一時頃から當日の期待となつて居る講演會が開催された。先づ坪内博士の演劇の極端な寫實主義、自由主義に就いて趣味ある談話の内に輕い諷刺を與へられ、島村講師の卒業後の注意、校友正宗白鳥氏の簡單然し鋭い人生觀、文藝觀、藤井、白松兩講師の將來の早稻田大學教育に對する希望、東儀副幹事の運動會に對する希望等あり其れより學生山下氏の新派落語、上嶺氏の薩摩琵琶、無名氏の壺坂等は會集に充分の興味を與へた。斯くして文科大會は終りを告げ、會員は談笑歎語の中に品川行の電車に投じた。

當日の出席者は學生の外

●坪内講師 ●金子講師 ●島村講師 ●戸川講師 ●ス・テイヴン講師 ●東儀副幹事 ●藤井講師 ●片上講師 ●白松講師 ●武田講師 ●平野講師
校友小杉天外 ●正宗白鳥 ●河野桐谷 ●秋田雨雀 ●橋本二等の諸氏である

▲雄辨會公開演說會 雄辨會は毎週金曜夜例會を開きて已に百十回に如び東都學生界に雄視せるが今回は又例年の如く神田青年會館に去る二十四日公開演說會を開催せり

當日は正午を過ぐる一時間既に満場立錫の地なく一時半には止むなく入口に滿員の札を張つた

委員淺川保平君の開會の辭に次いで梶山芳介君が立つて新政黨に就いてと云

ふ演說をなし次に山森利一君が偉大なる國民と云ふ題で熱烈なる辨を試み、次には宮澤胤勇君が立つて流麗なる辨論を試みられた演題は雄大なる使命、次には坂入準三君が批評と人生と云ふ演題の下に沈痛悲愴人をして襟を正さしめずんば止まずと云ふ雄辨を振はれた、それから村岡清次君が立つて痛快な口調を以て南風不競と云ふ奇抜の演題を巧妙にやり通して、次は中村鶴君演題は機運到る慨慷悲憤巧みに聽衆を感動せしめた、右學生辨士終りて來賓木下尚江氏は死河の半夜と云ふ題の下に足尾の問題より説き起し田中正造翁の人格に立ちいたり一時有餘聽衆を感憤せしめた、次は大隈伯(伯の演説は別項にあり)次に望月小太郎氏立ちて我が國民對外的信用の墮落と云ふ題の下に雄辨を振はれた氏は近時日本の海外に於ける信用墮落を説き引いて日本の政治界實業界の腐敗の現状を説き更に現代青年に訓ゆとて成功の意義をとき日連の人格を説き人間處世上偉人の崇拜すべきを論じて約一時間満場森として聲なし、次は會長田中穂積氏、氏の演説は日本は世界の一等國にあらずと云ふ題にして沈痛の口調を以て日本の現状を説き未だ遠く歐米文明國に及ばざる點を述べ更に轉じて大國民の理想を説きて日本國民の世界に對して採

るべき態度を説き、倦み勞れたる聴衆に何等の厭感を起さしめず満堂を酔はしめた。五時散會、聴衆約千五百名蓋し近來の盛會なりき

▲第四十七回寄宿舎修養部例會 一時部下の雅人をして酔はしめたる爛漫たる櫻も情を知らぬ春風の爲めに散らされて只残れる葉櫻が當時の俤を忍ばしむるのみ、今や吾人は漂々乎として浮きたる足を確かと踏み修養すべき時は來れり、此處に於て我寄宿舎にては四月十七日午後六時より第四十七回修養部例會を開く壇上頗る賑はひ出演者十六名に達す、招聘辨士としては煙山文學士副島法學博士兩氏あり末曾有の盛會を極む出演者氏名及び演題左の如し

一、開會之辭	委員 山 森 利 一
一、春怨(初陣)	片谷千代松
一、義士論(初陣)	渡邊 熊 吉
一、自己廣告	羽丹生長太郎
一、虛榮論	山本秀左武郎
一、趣味と舍風	早 川 欽 介
一、快樂論	天滿善次郎
一、學力と金力	川上 法 勵
一、國民としての支那人	村田 寛 三
一、舍風と精神	山 泉 利 重
一、悲壯なる偉人	山 森 利 一
一、代表的人物之自覺	原 安 三 郎
一、未來の紳士富豪に望む	平内房次郎
一、所謂こきゅう	居城新三郎
一、人格之力	河 岡 英 男

一、所感 舍友 大野 泰 平
招待辯士の方は煙山先生は「文明史上のスウキス」に就てスウキスは國は小なれども文明史上に及ぼしたる影響の大なるを述べられ副島先生は「歐洲に於ける余が目撃」と云ふ題の下に獨乙皇帝の日常生活其他獨乙國民の特色等に就いて一時間に涉り有益なる講演をせらる、右終りて茶菓に移る、餘興のなかりしは物足らぬ感なりき散會せしは十一時過、(村田月嶺)

運 動

第三十二回 大運動會記事

四月三日舉行す可き答の大運動會は順延又順延を重ねて五日朝來の花曇を物とせず本校一流の斷行主義を以て一發の狼煙を相圖に午前九時より舉行した。花の彌生は何處でも賑ふものであるが今日は久振りの曇天殊に新界の大立物たる本校大運動會のことゝ泥濘を意とせず紳士淑女さては學生職人等の觀覽者續々如く晝頃一寸惡戯雨があつたため一時は何うかと危むだが其も程なく歇んで温かい日光はサツとグラウンドを照して四邊はのんびりとした春景色となつた。午後よりの人出は一層はげしくさしも廣き運動場も忽ちして立錫の地もなき迄に至つた。縦横に引き廻はした萬國々旗は折から吹き來る軟風に天に舞ひ地に翻へり正面貴賓席の杉葉も綠濃く何れも平和の春の色を泛べて居る。入口の外には園子屋を初め色々の模擬店軒を併べて客を引いて居る。競技は數々を重ぬるに徒つて面白く第一回の母衣走は例年乍ら美麗で遠き頼朝時代を忍ばせる。櫓ころがし、

障害物競走は宛るで輕業師の機。サツク競争の滑稽さ實に觀覽者を嬉ばした。當日の花形なる餘興は壁頭第一大商一年の早稲田祭、連中御揃の印紳纏に草鞋ばき神武天皇の山車を手に引かせつゝ早稲田音頭勇ましく場内を一周した、さすが商科だけあつて、こつた者だ、次は寄宿舎生の一才法師行列高砂の焼と姥とを先きに高橋夫婦女學生なぞと後からと出るは、實に抱腹又絶倒終りに法師ダンスをやり出すと互に、ぶつかり合つて倒れる其を起すと云ふ滑稽觀覽者の拍手は霞の樣當日餘興に於ける白眉であつた。たる端は水野、綠川、村川の順柔道部の土俵入は年を重ねるに隨て巧妙本場所もそつちのけた。對部競走は團體競走にて庭球部の勝。事政二年の明治百年は思はず見物人の頭を解かしめた。高等理科の里の小町嫁人行列は有志の少ないため見物人は左程迄と思はなかつたが他の餘興に比して優るとも劣りばしなかつた。其間自轉車曲乘が演ぜられたがさすが其職にあるものだけあつて場内水を打つた如く技を進むるに從て拍手起り思はず感激の聲を洩しめた。第廿八回の各専門學校來賓競走は一高の明石(一分廿八秒)清瀧が二着第廿二回は觀客の待に待つたる當日第一の呼物たる分科競走場内は一時に色めき渡り赤、白、紫、綠の各科應援旗は手から手へと靡き渡り觀客は今か今かと片唾を呑んで待つて居る。政治科の津江氏去りてより文科の勢凄まじく今年こそは名譽の優勝旗を奪はんと其の聲援の如き早稲田小學校の生徒をして是にあらしめ實に躊躇であつた。觀客も文科の必勝を疑はなかつた。それ故他科も練習を怠らず當日は面白い觀客を喰らせる競走を見せるだらうと思つた。政治科は昨年の名譽を奪はれじと是も聲援至らざるなく商科の如き石油鐵をたきて聲援した法科に至りては哀れ振はなかつたが其の態度たるや願る自重するものゝやうであつた。

午後五時十分觀客の歡呼と數多の應援の下に各選手はスタートに付いた。安部委員總長は慎重なる態度で勵聲一番「ヨイ」此瞬間場内寂として聲なく觀客は肩を怒らし手に汗を握りて見て居る各科應援隊も喝を靜めて己が選手の方を見てゐる。忽ちドンと一發白煙上ると見る間に八人の選手は各應援の下に走り出した。スタートより四呎許りにて法科(綠)轉かり倒れしが他選手は物とせず政治科の最上谷(赤)は何時も先登に立ちて悠々迫らず商科(紫)之に次ぎ本年の必勝者と目せられし文科の二階堂(白)は満を持して放たざる態度にて四番目に走りしが第二回週より益々速力を増して三番となり第三回週より最上谷はいよいよ速力を増して走る婦人席の邊より競走妻まじく商科の竹内先登の赤に迫ることいよいよ急此にて戰闘は激しく白はラストヘビーを出して益々迫りしが時は遅かりき號砲一發發觸たる名譽の優勝旗は再び政治科の手に歸し拍手喝采は戸塚丘上をゆるがせ赤旗夕日に輝きて落花紛々、然れども決勝點の問題より政、商兩科の間に物議起りしが和田垣審判長の仲裁により無事に收りたり。觀客は最早や蜘蛛を散らす如く各歸途につけり千ヤードは一等岩村、村川の順にて散會したのは暮色蒼然として薄霞淡く春島嶼に歸へる頃であつた。

當日分科競走選手は左の如し

政治科(赤)	最上谷富次	大戸 憲勝
法科(綠)	古野 文喜	久保村久次郎
文科(白)	二階堂行善	舟木 秀雄
商科(紫)	竹内 一良	村井 五郎

一等 政治科 最上谷富次 (一分二十六秒)

▲神戸高商對本校庭球試合 東京高商に見えて一敗地に塗れたりと雖も其華々しき活動は大に世人の注目するに價ありし神戸高商は四月十

▲本校庭球部大會(四月二日午後一時より)

▲三高對本校野球試合 四月十日午後二時

二十分三笠氏審判の下に本校グラウンドにて舉行
此日朝來より晴天にして南風強かりしが好球家の
來場夥しく無慮萬人と註せらる。本校のパツテリ
ーは大井、松田の二君、早軍意氣衝天の慨を以て
第二回戦野々村君二死者の後を受けて安全打し二
點を占む三高軍振はず第三五の兩回はバントを弄
して敵軍を攪亂す然れども櫻軍少しも振はず遂に
○對六のシャットアウトにて早軍大勝す三高軍破
れたりと雖もその武者振男々しく投捕の確實なる
賞すべき點少からざりき此内大井松田のパツテリ
ー大に振ふ其他野々村君の離球を捕へし等見る可
き者あり山脇氏卒業後は大井、松田二氏のパツテ
リーなるべし當日兩軍のメンバー得點を示せば

[illegible]

子は如何に其學術を組織せしか、『支那天子の名義と其古代祭天』『讀說難』『周代學制考』『支那文字の構造及び發達に關する西人の研究』『韓非の學生を論ず』『四書の心理的表象』等有益な研究が多い(定價七拾錢)

●子どもの研究 文學博士中島力造序
波多市松著 實業の日本社

本書は兒童研究と家庭教育の改進の目的で、初めは平易な常識より出發し次第に之を科學的心理的に解明し最後に道德及び技術に對する兒童の發展を研究した有益な著述である主としてジェームス・サリイ氏の“Children's way”を參考としたものと言はれて居る(正價九拾錢)

●最新庭球術 早稻田大學庭球部編

本邦庭球術の進歩は時日の比較的短期であるに拘らず、他の各種の運動に比して決して遜色あるものでない、ばかりではなく却つて其の研究と獨創のあり點に於いて他の運動を壓倒すべき勢力を具體して居る。本書の如きは摸倣を脱した日本庭球界の獨創的著述の魁をなすもの、然も編者等は運動と文筆を兼ね備へたる人々である丈け讀者は此書に依つて研究と趣味とを共に味ふ事が出来るだらうと思ふ。(正價五十錢)

●圖書館寄贈の書目 洋書の部

1. Amer. Alt. (Syed) :—Islam..... 1 vol.
2. Wortabet, J. :—Arabian Wisdom..... 1 vol.
3. Hallid, H. :—The Crescent versus the Cross..... 1 vol.
4. W.H.Q. :—The Faith of Islam..... 1 vol.
5. Koran (Arabic Original)..... 1 vol.
6. Schmitz du Mouth :—Islam..... 1 vol.
7. Garrigues, M. :—Simples Lectures sur les Sciences..... 1 vol.
8. Chassang, A. :—Les Aventures des Tekmanque..... 1 vol.
9. Buchheim, C. A. :—Modern German Reader. (Clarendon Press Series) 1 vol.
10. Hughes, W. :—A Class-Book of Physical and Astronomical Geography. 1 vol.
11. Garollo, G. :—Geografia Elementare. 1 vol.
12. Comba, E. :—Nuovo Compendia di Geografia..... 1 vol.
13. Geleisch, E. :—Karten kunde..... 1 vol.
14. Gotha'scher Geographischer Hofkalender..... 1 vol.
15. Dubois, M. :—Geographie générale..... 1 vol.
16. Jimbo, K. :—Notes on the Minerals of Japan..... 1 vol.
17. Wada, T. :—Beiträge zur Mineralogie von Japan. No. 1. 2..... 2 vols.
18. Nishinada, K. :—Useful Minerals of Korea..... 1 vol.
19. Gottsche, G. :—Geologische Skizze von Korea..... 1 vol.
20. Brassey's The Naval Annual. 1906. 1 vol.
21. Chamber's Concise Gazetteer of the World..... 1 vol.
22. De Lapparent, A. :—Treaté de Géologie..... 3 vols.

23. The Geographical Journal. Jan, '05—Dec, '06..... 1 vol.
24. Пятикович, О. О. Элементы арнай Географии..... 1 vol.
25. Смирнов, С. К. :—Учебник нига Географии..... 1 vol.
26. 右山上高次郎氏寄贈
Princeton University Catalogue 1908—9..... 1 vol.
27. 右フリストン大學寄贈
Memoire of the college of Science and Engineering, Kyoto Imperial University..... 1 vol.
28. 京都帝國大學理工科大學寄贈
University of Pennsylvania Catalogue..... 1 vol.
29. 右ペンシルバニア大學寄贈
和漢書の部
悲劇オセロ 一冊 菅野徳助氏
最刑事政策根本問題 一冊 波多野重太郎氏
近(大場茂富氏著) 一冊 川口嘉氏
有眞機家案 一冊 日高有倫堂
社會主義と國家 一冊 智利硝石普及會
肥料改良論 一冊 日本本部
増訂 藤田電燈學 一冊 電友社
三版 藤田電燈學 一冊 本校出版部
日本近世時代史(徳川氏) 二冊 成功雜誌社
逆境の勇士(堀内新泉著) 一冊 日宗新報社
日蓮聖人御遺文 一冊 益田孝氏
宗湛日記 一冊 竹田豐說氏
法然上人全集 一冊 外十三氏
圓光大師傳緣記目錄 一冊 同
圓光大師傳 一冊 同
紫圓廿五紀 一冊 玉置住子
日本醫史 第三輯 一冊 富士川游氏
普通植物圖譜三ノ九、十二冊 博物研究會

- 子どもの研究 一冊 益田義一氏
- 英語句讀法 一冊 同
- 自強術 一冊 同
- 三洲居士集 映入 五冊 長壽吉氏
- 聖教要録 一冊 柳谷謙太郎氏
- 第廿世紀理想論第六編 一冊 日本文明協會
- 國民性情論 第六編 一冊 同
- 法華經講義 一冊 早稲田日蓮主義研究會代表者
- 馬田行啓氏
- 興國の宗教 一冊 同
- 神山要路會註 一冊 同
- 立正安國論新註 三冊 同
- 御義口傳鈔 二冊 同
- 御府内十八個所道しるべ三冊 室井平藏氏
- 小機海 一冊 空閑知露治氏
- 日本倫理史(帝國百科全書) 一冊 河岡英男氏
- 東都學校評判記 一冊 同
- 樂翁公偉績講義集 四十八種 高田早苗氏
- 外報告書諸雜誌共 七十一冊 同
- 第二次統監府統計年報 一冊 統監府出張事務所
- 韓國政年報 一冊 同
- (明治四十九、四十年) 一冊 同
- 明治 福島縣第廿五回統計書 一冊 同
- 早稲田大學一覽 一冊 同
- (明治四十一、四十二年) 一冊 同
- 無門關提唱 第十九回 一冊 少林會
- 滋賀縣統計全書 一冊 同
- (明治四十年) 一冊 同
- 羅府年鑑 第二卷 一冊 中村新太郎氏
- 明治廿九年日本帝國人口狀態統計實數及比例 一冊 內閣統計局
- 同年日本帝國死因統計實數及比例 一冊 同
- 明治廿九年財政始末報告 一冊 大藏省
- 七十八年戰時財政始末報告 一冊 同
- 第一高等學校一覽 至明治四十二年 一冊 同
- 明治四十一年特許局審決錄 一冊 特許局
- 附大審院判決錄 一冊 同
- 工業雜誌 四〇七 一冊 同
- 京都美術 一五 一冊 同
- 東京市日比谷圖書館一覽 一冊 同
- (明治四十一、四十二年) 一冊 同

- 小樽商會陳列會報告書 一冊 小樽商業會議所
- 明治四十年年度鐵道局年報 一冊 鐵道院總務部
- 明治四十年年度鐵道統計圖表 一冊 同
- 第二拓殖地民要録 一冊 小泉清治氏
- 北海道全圖 一冊 同
- 小樽、函館、釧路、留萌、網走、根室、旭川、紋別、物産に關する、智的計畫(ト、ラッパン博士述) 四冊 林壽太郎氏
- 大我神教 一ノ二 一冊 同
- 農商務省商品陳列館報告書 一冊 同
- 新世紀 一冊 同
- 名古屋通俗圖書館報 一冊 同
- 公立私立認定學校關立調查 一冊 普通學務局
- 關立調查 一冊 本校出版部
- わせた 一冊 同
- 第廿三次農商務統計表 一冊 同
- 印刷同志 五ノ四 一冊 同
- 京都府立京都圖書館一覽 一冊 京都府圖書館
- 同館紀念繪畫書入アルバム 一冊 同
- 阿雄博覽會案內 一冊 同
- 米國ワシントン州日本人會 中村定氏
- 府縣聯合共進會審查復命書 二冊 同
- (長野) 山口主權第四回中國六縣聯合農產共進會等 一冊 同
- 明治四十年福開縣統計 一冊 同
- 青第三論(勸業) 一冊 同
- 歐米各國美術工藝圖案 一冊 隨鳴社
- 關スル報告 一冊 同
- 世界お伽文庫 一冊 同
- 第十號活地錄 一冊 同
- お伽畫帖一寸法師 一冊 同
- 第廿三號 二ノ五 一冊 同
- 冒院世界 一冊 同
- 女子大學講義一ノ一 一冊 女子大學通信教育會
- 信心 一ノ一 一冊 同
- 明治四十一年下半年長崎商業會議所半年報 一冊 同
- 京都府立圖書館新築紀念繪畫書 一冊 川手龜之助氏
- 新潟縣下石油製造業統計表 一冊 長岡商業會議所
- 瑞穂集 二部二冊 釋義堂氏
- 島根縣治一班第十六回 一冊 同

大日本帝國油田第九
道地質及地形圖

一枚 地質調査所
一冊 同
一枚 同
一冊 同

周防津圖幅

一冊 同

同上説明書

一冊 同

寫真タイムス
昌圖外觀

一冊 明治製版所
八冊 山上萬次郎氏
外九十二種四百八十三冊

◎本年度維持費納付人名(前々號の續)

●金貳圓宛、中村新太郎、伊藤竹松、木村正樹、石川賢三、角田曉雨、陸夢然、野口喜一、櫻山孝太郎、武田豐四郎、白松孝次郎●金五圓宛、田島一義、上遠野富之助、中川末吉●金貳圓宛、鈴木源一、松岡善胤、水崎保、三上廉平、劉同彬、三田村勘十郎、覺張半四郎、山口政治、久須義東馬、御手洗學、廣井一、白柳武司、中里眞清、田中樂文、宇都宮虎二、川邊秀次郎、片岡樹太郎、坂井牧之助、川口準太郎、小林哲、林府太郎、細梅三郎、上田確郎、霜島幸次郎、北山一郎、木槍三四郎、川口精一、本田吉次、吉見三郎、富澤義嗣、伊東祐保、矢部善藏、畑田源輔、佐藤德一郎、奥村千太郎、藤村文兵衛、久山順平、久繼啓作、榎本三郎、深水龍太郎、大山萬吉、田中小太郎、布施孝、吉澤貞右衛門、大熊元吉、大槻高藏、市川直助、鞍谷清慎、瀬古守藏、内藤肇義、深見顯宏、崔寧賦、植山八郎、濱勝雄、安達弘真、青木盈藏、和島藏之助、依田英一、横瀬乙吉、楠田辰藏、綿田久吾、小野善太郎、松本文三郎、辻村真衛、岸本萬次、秋山正一、森本滋樹、石岡英太郎、衣川退藏、和田純、廣橋治郎、酒井與三郎、内田銀藏、吉成竹治、薄井福治、館岡重四郎、小林魏一郎、樋渡清義、森龍太郎、後藤五郎右衛門、内田益三、米谷長三、石黒雅美、中島常介、二見昇、川原惟基、大岡忠友、青柳長次郎、東兵藏、後藤龍藏

松平賴壽、川喜田久太夫、佐藤久雄、澤田泰治、喜田村正久、古田次雄、津田敬一、島津久賢、井本滿助、前野長治、小田野義壽、多賀富藏、館野發三郎、田村榮藏、陸井市太郎、一色利武、梅田清、瀧池虎太郎、野村勘左衛門、原木吉太郎、大橋治輔、大屋善次郎、貞弘正興、齋藤保次、山地寅太郎、峰須賀武彦、守屋守三、土井潔、堤傳次郎、赤津亮次郎、小野義夫、今逸郎、時山勇、水谷研孝、清水繁三、久保田實宗、船田弘道、成毛基雄、日野威、米本多七、西村愛吉、長井勝太、鈴木正峻、長濱庭三郎、長谷川綱榮(以下次號)



明治四十二年五月五日印刷
明治四十二年五月五日發行

編輯兼發行人 田中唯一郎
東京市牛込區早稻田大學校友會

印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

發行所 早稻田學會
東京市牛込區早稻田大學內

現代社會に對する深刻痛切の
八面鋒

前文部次官澤柳政太郎先生新著



四六版洋裝總クロス天金箱入空前の美本上等洋紙二百五十頁
正價金壹圓 郵税金八錢

著者の序文に曰く、『官遊十數年、其間、人よりも多く云ひ、多く論じたるも、尙ほ腹ふくる、心地を忍んで、言はざりし者多し。』と。知るべし、本書は、先生が、實歷上、百般の問題に逢着して、滿腔の所感を披瀝したるものなることを。諷刺あり、教訓あり、感慨あり、痛罵あり、氣焰あり、理窟あり、警拔にして透徹せる觀察あり、大膽にして穩健なる斷案あり、言はんと欲する所は言ひ盡くして、毫も時勢に阿らず、誠に憂國警世の大字なり、經世家、教育家、宗教家、及び現代の青年諸君は、須く一讀せざるべからず。

曹洞宗大學講師忽滑谷快天先生著

東京帝國大學講師
文學士 常盤 大定先生著

達磨と陽明

定價七十五錢
郵税八錢

釋迦牟尼傳

定價七十錢
郵税八錢

社版出午丙 町原區川石小京東 館隆北 堂京東
六八六五一京東貯 開榮文 堂海東

新刊發行廣告

早稻田大學寫真帖

目次

●圖書館其(一)	●早稻田大學本部	●早稻田大學寄宿舍	●早稻田中學學校	●早稻田實業學校	●早稻田大學出版部	●早稻田大學機關印刷所	●早稻田大學訪はれたる貴賓及名士其(一)	●早稻田大學訪はれたる貴賓及名士其(二)	●早稻田大學訪はれたる貴賓及名士其(三)
(十九)	(二十)	(廿一)	(廿二)	(廿三)	(廿四)	(廿五)	(廿六)	(廿七)	(廿七)

●大隈伯爵邸其(一)	●大隈伯爵邸其(二)	●大隈伯爵邸其(三)	●大隈伯爵邸其(四)	●評議員會々長前島男爵及邸園	●早稻田八景其(一)	●早稻田八景其(二)	●早稻田附近雜景
(廿八)	(廿九)	(三十)	(卅一)	(卅二)	(卅三)	(卅四)	(卅五)

早稻田大學

四六四倍版形
總洋布頗美本
小口金箔付
コロタイプ印刷
總計三十五枚
正價四圓五十錢
送本費金貳拾錢

目次

●早稻田附近平面圖	●早稻田大學平面圖	●早稻田大學第二期擴張設計圖	●大隈伯爵同令夫人肖像	●故小野梓氏と三博士肖像	●早稻田大學全景	●早稻田大學正門及構内	●講堂其(一)	●講堂其(二)
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)

●講堂其(三)	●講堂其(四)	●大學創立二十五年祝典光景	●恩賜感謝式	●憲法發布二十年紀念式	●體育部其(一)	●體育部其(二)	●體育部其(三)	●圖書館其(一)
(十)	(十一)	(十二)	(十三)	(十四)	(十五)	(十六)	(十七)	(十八)

發行所 東京牛込早稻田大學出版部

電話番三二一—東京替振◎番四七三町番話電

特 價 提 供

池田晃淵 小林庄次郎 本多辰次郎 共著

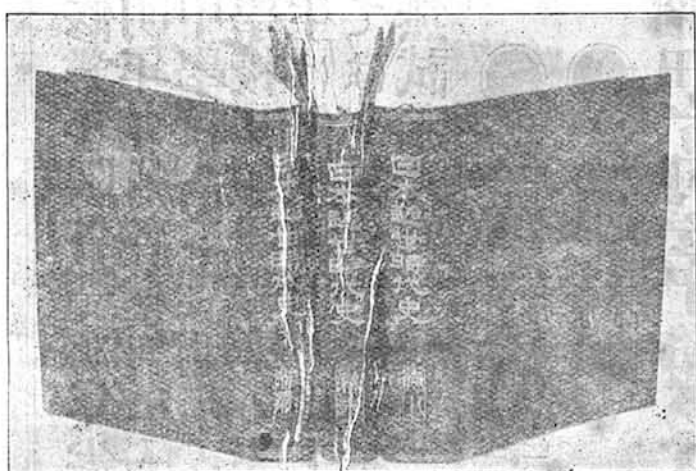
全部 完成

日本近世時代史

(德川史) (幕末史) (維新史) 全部三卷

菊版脊皮金銀箔付頗美裝紙數二千二百五十頁每卷コロタイプ數葉入

正價金六圓五拾錢 特價金五圓五拾錢 小包料壹圓目 全部三卷の外分賣せず



謂々の史論精緻の考證を以て滿天下の讀書界を震撼したる本史は噴々好評の間に全部の完成を告げ其装釘の雅麗は好書家をして轉た垂涎せしめたり願ふに德川幕府盛時の歴史は幕府の自撰に成れる德川實記に依て幕府に有利なる史實の一斑を伺ふべきも以て幕府の陰險手段と其失政とを見るべからず幕末以降維新前後の史實に至りては利害關係の衝突に基ける幾多曲筆舞文の野乘あるのみ以て正史の一斑をも伺ふべからず是れ史家の久しく遺憾とせし所なり然るに今や本史の大成せるあり老獺家康の豊臣家を亡せる幾多の奸譎手段を知り得ると共に其智謀の絶倫なるを知るべく幕府の腐敗を知り得ると共に三百年の泰平を致せる原因を明にするを得べく薩長諸藩の幕府に臨める惡辣手段を詳にすると共に幕府の無謀無策眞に憐むべきを搜るべく最近四百餘年間に於ける世變の真相は凡て本書に依て之を慥むべし蓋し本邦近世史の上乗たるものなり

殘數少品切後ハ永久絶版タルベキニ依リ御注文ハ願上候

東 京 牛 込 早 稲 田 大 學 出 版 部

電話番三十七百四番 振替口座東京壹壹貳番

!! 注意 !!

●修業年限各一ケ年半にして
 ●明年九月各本科に入らしむ
 ●中學校、甲種商業學校、工業
 ●學校其他同程度の學校卒業
 ●生は無試験但し理工科に於
 ●ては卒業成績優等者に限り
 ●無試験入學を許す

注

意

早稻田大學高等豫科學生募集
 (規則書要三錢郵券)

●政治經濟學科
 ●法學科

●文學科 ●商科
 ●理工科

!! 注意 !!

明治三十年三月十一日第三種郵便物認可
 明治四十二年五月五日發行(毎月一回五日發行)

注

意

●本會社ノ資本金ハ壹百萬圓ナリ

●本會社ハ保險契約者ニ利益ヲ配當ス

●本會社ノ保險種類(終身保險、養老保險、教育資金保險)

社長男爵 前島 密 專務取締役 池田 龍一

本社東京市京橋區惣十郎町五番地電話新橋四二八一番



日清生命保險株式會社

取締役 牟田口元學 取締役 來栖壯兵衛 取締役 山田英太郎

取締役 田中唯一郎 取締役 金澤種次郎 監查役 増田義一

監查役 浮田桂造 監查役 上遠野富之助
相談役 男爵 澁澤榮一

相談役 中野武營 相談役 相馬 永胤 相談役 麥 少 彭

相談役 高田 早苗
法律顧問 法學博士 鳩 山 和 夫